平成30年4月1日発行第15巻第2号通巻112号

cover illustration by MISS BLACK

二次元ドリームマガジン

2D DREAM M.

18 未満

2018 04 Volume.99 DIGITAL EDITION

今号の特集 Special Fetishism Series

悪女

死よりも苦しい快楽地獄――耐えられるかしら？

カラーピンナップ COLOR PINUP

叙火 ぱふぇ／MISS BLACK

表紙&ピンナップテレホンカード 応募者全員サービス

【えっちマンガ】
時丸佳久
楠木りん
ぱふぇ
緋乃ひの
尻戦車

【連載&読み切り小説】
屋形宗慶×秋月からす
冬野ひつじ×神崎詩音
高岡智空×インフラトン
氷室凛子×馬克杯
新居佑×もり苔
空蝉×MISS BLACK

電子書籍限定の単行本も大好評！
『魔剣士リーネ2』
酒井仁×桐島サトシ
原作：まくらカバーソフト

『装刃戦姫サクラヒメ』
有機企画×緑木邑

大人気PCゲームのノベライズが好評連載中！

BEAT VALKYRIE EXSEAL
超昇神騎エクシール
小説：峰崎龍之介
挿絵：孫陽州
原作：ALICESOFT

試し読み版

快楽と痛みで凍てついた正義の炎!!
敗北ヒーローの絶望末路
セイレッド VS リティアナ
氷の元帥
慈悲なき女の淫技に鳳凰堕つ!
小説/NOVEL 空蝉(うつせみ)
挿絵/ILLUSTRATION MISS BLACK(みすぶらっく)

「フフ、どうした。もう抵抗は終わりか？」
緩やかにウェーブがかった髪を腰まで伸ばした女。禍々しい顔が前面に描かれた軍帽の下に冷徹な美貌を備えたその女が、勝ち誇ったように冷たく笑う。
やはり両肩に禍々しい顔の描かれた軍服を、胸の谷間が丸出しという極度に露出度の高いレオタードの上に羽織ったその姿は、威圧的であると同時に煽情的でもある。
黒色で揃えられた軍服とレオタードから覗く、雪のように白い肌。中でもやはり勝ち誇りのために反らされた豊かに過ぎる双乳――明らかに大の男の手のひらにも余るだろう特大サイズのそれが嫌でも目に入ってしまう。
「……辺り一面こんなに凍らせちまって」
街は、女の放つ冷気によって――正確には、女が攻撃する際に生じた冷気の余波によってビルも道路も、そこに生きていた人々もすべて凍りつき、息絶えてしまった。
（……救えなかった）
基地でバックアップしてくれているスタッフが避難指示を出してくれてはいたし、共に戦い、先に退いた仲間もでき得る限りの命を救おうと尽力してくれた。それでも万単位の命を失わせてしまった。尽きぬ悔恨が、正義を抱く少年の胸に鋭利な刃となって突き刺さる。
その痛みと、痛みをもってしても打ち消せない羞恥心。両方を振り払おうと、声を張る。
「あんたはそんな薄着で寒くないのかよ？」
――駄目だ、意識するな。
女性に免疫のない己の未熟さが恨めしく、恥ずかしい。戦闘用ヘルメットの奥で火照る顔と、赤く染め抜かれた強化ボディスーツの内側でざわめく心とをひた隠すため。愚にもつかない言葉を投げかけてしまう。
何か喋って気を紛らわせていないと、とうに限界を超えている肉体を立たせておくことが難しい、ということもあった。
「……オレは平和を護る星レンジャーのリーダー。鳳凰座の戦士、セイレッドだ……っ」
人類の希望を背負う自分が、今ここで倒れるわけにはいかない。正義に殉ずる覚悟を確かめるように己の使命を、加護する星を、名を口にした。
だが、踏ん張りを利かせたはずの脚が情けなく震え、気を抜くとすぐにでも意識が断ち切れそうで、ついには荒い息を吐きながら相手の顔を睨み返すのも難しくなった。
（今目の前にいるこいつは女である前に、人類に仇なす組織の幹部。これまでも散々苦しめられてきた怪人どもを指揮する女元帥リディアナ……！）
だから、決して許すわけにはいかないのだと。星座の力を得て戦う星レンジャーのリーダー、鳳凰座の戦士として持てる力のすべてを出して戦った。
それでも氷の力を無限に振るう相手に、敵うことはなく。負傷した仲間四人を逃がすため、単独で身体を張った結果が、このざまだ。
「フ……」
「……っ。その鼻で笑う癖、人が気を悪くするからやめろよな！」
血気盛んな小僧をあしらうように再度鼻で笑った妙齢の肉体の胸元で、また二つの膨らみが縦にぶるんと弾む。酷薄なほどに美しい顔に浮かんだ冷笑は、遺憾ながら寒々しい風景に恐ろしくマッチしていた。
「この光景は手始めだ。ここから、今日より始まるのだ。宿敵であるお前たちを敗った、今日からな」
街一つをやすやす凍結せしめたリディアナが、どこか陶酔した様子で語りだす。その様が、どうにも腹に据えかねて。
「……まるで巨大な棺だ。こんな世界が、お前たちの目的、理想だってのか⁉」
わかりきってはいても、問わずにいられない。数多の骸を内包して凍てついた高層ビル群を見て感じたそのままを伝え、続けて怒りをぶちまける。
理解不能の相手の一方的な押しつけに従ういわれなどない。屈してたまるものか。正義の使命が再び胸の内より熱き焔となって燃え盛り、凍える身に喝を入れてくれる。
「じきに世界中が同様の姿に変わる。人ひとり、虫一匹存在しない、銀世界。そこを闊歩することを許されるのは、かつて異界へと追いやられた我ら一族だけだ」
「……リディアナ……」
長年の怨嗟がこもった彼女の物言いが、ヒーローの心を揺さぶる。その、非情になりきれぬ甘さ――正義の心の源でもある「情けの心」が、この時ばかりは災いした。
――ビシィィィッ！
「……ッッ⁉　くっ……！」
先の戦闘でもたびたび苦しめられたリディアナの氷の力をまとった鞭が、ヒーローの脚を掬おうと、地を這うように迫り来る。
とっさに飛び退ろうと試みるも、限界を超えて久しい脚が思い通りに動くわけもなく。疾風のごとく飛来した鞭先に右足首を搦め捕られ、地べたに引き倒される。
「ぐ、ぅっ」
強化スーツのおかげで、受け身も取れず地べたに後頭部を強打したことによる影響は――痛みも、脳震盪も、何もない。
ただ――。
「ぎゃっ、あああああ……っ！」
鞭に搦め捕られた右足首が、強化スーツごと凍りつく。リディアナの足元へと引きずられゆく、時間にしてわずか数秒の間に、凍傷は足首から膝のすぐ下あたりにまで広がった。

著者近況　久しぶりの本誌掲載ということで緊張しつつ。惹かれるテーマでしたので楽しく書かせていただきました。

鞭を振り解こうと足掻く間すらなく。

――ズドッ！

「ッッ!!　～～～～～ッッ!?」

リディアナの長い脚を覆うサイハイブーツ。その靴底によって、仰向けの股間を踏み抜くように痛打された。

喉元から正義のヒーローらしからぬ、あまりにも情けのない悲鳴が吐き漏れそうになるのを、無理やり唾ごと飲み戻して抑えこむ。

だが、腰骨を伝い心底にまで響いた電撃じみた痛みは一向に引かず。人外の膂力で急所を踏み抜かれたことにより、呼吸もままならない有様に追いこまれてしまう。

「総統閣下に率いられた我ら、より優秀な種族である我らこそが、地上の支配者たり得る。単純明快な話だろう?」

単に優劣で物事を決めようというその口ぶりには、怨みも、慈悲も、人としてあるべきものが何一つ感じられない。受け止めるレッドの胸には、ただただ怒りと、哀しみばかりが渦巻いた。

「お前たち人類は地下に落とされ、我らの奴隷としてのみ生を許される。逆らう者は……」

――ビキビキビキッ！

「ぐはぁぁぁぁっ！　あっ、あぐぅぅぅぅっ！」

すでにレッドの右足を地面ごと凍りつかせている氷の塊が、瞬時に大型犬ほどのサイズにまで肥大する。無数の針で突きまくられたような鋭い痛みは最初だけで、じきに麻痺し、氷の重さも感じられなくなった。

が、感覚が失われたことで、反撃の可能性を完全に封じられた絶望感だけがひしひしと胸を抉る。

残る左足も、両肘も、右足ほどでないものの凍結して地べたに張りつけられてしまっている。肘から先は自由だが、精魂尽きた状態ゆえに、衝撃に応じて震わせるのがやっとの有様だ。

腰の上、股間には、なおもリディアナの靴の踵が乗っていて圧をかけてきており、身じろぎすら叶わない。

そして、リディアナの呼び寄せた雲により空のかなたの星の輝きが遮られ、星の戦士の力の源である光力を得られない肉体に、人を超えたる急速回復は望めない。

（オレは、ここで死ぬ……のか？）

戦場で死ぬ覚悟は常に持っていた。だから、死そのものに対する恐怖はない。

ただ、一矢も報いずに志半ばで倒れる無念の情が、マスクの下の表情に悔し涙となって表れる。

「……ッ、オレが倒れても、きっと生き延びた仲間がお前を倒してくれる……」

「フ……アハハハハッ」

負け犬の遠吠えと思い、笑ったのだろう。

（オレは仲間を信じてる。オレだって、ここで骸となり果てても、魂は空の鳳凰星座と共に在り続け、仲間の力となって共に戦い続けるんだ！）

だから精々今のうちに笑っておけ。希望を胸に、死という運命を受け入れようとした、まさにその時。

「気づいていないのか？」

股間の上に乗っていた女の脚が退き、思わずそちらへ――解放された己の股間へ目をやった。

「種の生存本能、ってやつだな。フフ、敵に殺されかかってる状況で、こんなにも膨らませて」

「な……っ！」

伸縮自在で生地そのものは薄い強化スーツであるがゆえに、内側の状況を鮮明に見てとれる。信じられない光景に目を剥き、瞬いてから改めて凝視する。それでもやはり、映る光景に変化はない。見間違えなどではない。

己の股間が、天を衝くように隆起している。敵である女の目の前で、子を残したいとの切なる想いを訴えるように、ビグビグと跳ねながら、見せつけるように勃起していた。理解した途端、これまで以上の羞恥が、凍えた身体に駆け巡る。

「我らよりも短命で、少しの環境変化や細菌感染で死ぬ、脆く哀れな人間種。それゆえの、浅ましい子作り本能というわけだ。フフ、滑稽だ……なッ！」

――グリッ！

「アひッ!?」

股間に不意に摩擦圧がかかり、図らずも甘い声を漏らしてしまう。あまりにも情けない響きを喉元に押し戻す間もなかった。

リディアナが手にしている鞭の柄で、勃起した股間を撫で繰るように弄ったのだ。そう視認したのは、羞恥と後悔の念に押しつぶされまいと足掻きだした矢先のことだった。

「まさか、私の中に子種を注いで子を成そうというつもりではあるまいな？」

「ばっ、馬鹿なっ……」

馬鹿なことを言うな――。

突拍子もないことを口にした女元帥に対して反論するよりも早く。

「見境のないチンポには仕置きが必要だなッ」

――グリュッ！　グリグリュッ！

鞭の柄が退き、再び靴の踵が降ってくる。振り下ろされるやグリグリと踵を支点に回転を加え、強化スーツごと隆起した股間を捩じってきた。

「ぎゃッ！　ぐぅッァああァッッ！」

先ほどまでの恥ずかしくも甘露なもどかしさが一変、再度降り注いだ痛苦の鋭さに悶絶する。迸る苦しみを少しでも逃がすべく身をよじったり、背を反らせたりしたかったが、四肢の凍結と、股間を踏みつける敵元帥の脚圧が一切の反抗を許さない。

鋭く突き抜ける痛みが、かえって意識を鮮明にし、己の置かれた現状の無様さが、その情けなさが、また新たな刃となって心を抉る。

（くそ、こんな屈辱……ちくしょうぉっ！）

対等な存在ではなく、徹底して下卑たオスとして扱われる。戦士としてこ

著者近刊　『魔剣士リーネ　許嫁と女騎士が寝取られる刻』『魔剣士リーネ　二人の姫が孕みし刻』『ヤブヌマ　侵食されゆく妻の蜜肌』『ヤブヌマ2　他人棒に啼かされる君が愛しくて』ほか
好評発売中！

BEAT VALKYRIE DEAL
超昇神騎エクシル
～双翼、魔悦調教～
第二話 峻烈なる紅、黒に染まりて
小説 NOVEL／峰崎龍之介
挿絵 ILLUSTRATION／孫陽州
原作 ORIGINAL／アリスソフト
毒婦に囚われた少女は己の欲望に蝕まれ……

じゃり……という音を聞いて、キリエルは目を覚ました。

「なんの音……？」

呟きながら瞼を上げる。視界は白んでいたが、数秒もすると焦点が合ってきた。まず見えたのはひんやりした印象の石組みの床。不思議なことに、表面には傷ひとつなかった。それどころか埃や塵すらない。綺麗に掃除されているという表現では足りない、潔癖とすら言える清潔さだった。

ただし――その場所の印象は、そういった物理的な清潔さを真っ向から裏切っていたが。ろくに照明がないせいで薄暗く、横たわる静寂は不気味ですらある。つまるところ、ここはひどく陰気な場所だった。

「……牢獄。ううん、なにかの研究室？　いずれにしろ、私を歓迎している感じじゃないね……」

当たり前のことを口にして、キリエルは上体を起こし――そこで、ふと気づいた。手首。なにか見慣れないものが取り付けられている。

それは手枷だった。金属製で、かなり頑丈そうだ。よく見ると、その手枷には鎖がくっついていた。目を覚ました時に聞いたのは、この鎖が擦れる音だったのか。

「引きちぎる……なんてことは、到底できそうにないね。鎧は辛うじて維持できてるけど……魔力がほとんど残ってない」

ひとまず乱暴な解決方法を諦めつつ、彼女は顔を上げた。するとそこがそれなりに広い部屋だということがわかった。十メートル四方はあるだろう。壁際には用途のわからない実験器具が収められた棚、簡素だがしっかりした造りのテーブルがある。テーブルの上には整頓された書類と、古めかしい羽ペンが並んでいる。先ほど抱いた『研究室』という印象は、どうやら当たらずも遠からずのようだ。

「……研究室、か。……はあ……」

一通り観察して――キリエルはため息を吐いた。

陰気で趣味の悪い部屋。厳重な、あるいは執拗な拘束。なんとなくだが思い当たる節がある。

「あら、目が覚めたのね」

と、声が聞こえた。いましがた思い浮かべたばかりの忌々しい声。

「シェムール……」

キリエルは嫌悪感を隠そうともせず、はっきりと声に乗せて告げた。その鋭い視線の先には、妖しい美貌を持つ堕天使――シェムールの姿がある。

（そっか、私……アゼルに負けて気を失って……そのまま捕まったんだ）

いまさらながらに状況を理解し、敗戦の悔しさを噛みしめる。と同時に、全身に鈍痛が走った。意識がはっきりしてきたのに合わせて、体の方も覚醒してきたらしい。

痛みは少しずつ、その強度を増してきていた。どうも思った以上に、体が負ったダメージは大きかったようだ。

（……あの攻撃をまともに食らったんだ。生きてるだけマシだと思わなきゃ。……ただ。あの場で殺されなかったのが幸か不幸かは……まだわからないね）

この毒婦が関わっているのであればなおさら――そう付け加えつつ、彼女は褐色の堕天使を睨んだ。

「……私室に招いてもらったのはありがたいけど、少し扱いが雑だね。お茶も出ないどころか、客をこんな風に拘束するなんて」

ダメージを自覚し、一切抵抗できないほど厳重に拘束された状態でも、キリエルは強気に軽口を叩いた。するとシェムールは眉をひそめて、

「呆れた小娘ね。そんな状態でまだ生意気な口が利けるなんて。……まあいいわ。どうしてここが私の部屋だと？」

「こんな陰気臭いところ、蛇の住処以外にあり得ないよ」

キリエルは即答した。継彦ならこう言い返すだろうと思いながら。

「……」

シェムールは無言だった。だがキリエルは、相手の頬が一瞬引きつったことを見逃さなかった。どうやら気に障ったらしい。堕天したとはいえ元は天使の彼女だ。『陰気臭い』などと言われれば、気にしないわけもない。

「……そういう態度は利口とは言えないわね。あなたの命は私が握っている。気分次第でいつでも捻り潰せる。そのくらいは理解しているでしょう？」

「そうだね。でも抵抗のしようがないのなら、機嫌を取っても意味なんてない。どうせ気まぐれで殺されるなら、自分を曲げるだけ損だ」

「……まったく、口の減らない小娘ね……」

思っていた展開と違ったのか、シェムールが苛々と呟く。それに内心舌を出しながら、キリエルは告げた。

「……エクシールは？」

現在最も気掛かりなことを訊く。一緒にアゼルに打ちのめされた蒼い神騎の姿が、ここにはなかった。

「虜囚の分際で質問とは、本当に弁えない小娘ね。あなたに質問する権利なんてないわ」

シェムールは質問をかわした――が、別に構わなかった。キリエルはほっと安堵の息を吐き、わずかに頬の緊張を解く。

「……なにを笑っているのかしら。仲間の安否が気になるのではなかったの？」

「それがわかったから安心したんだよ。……エクシールは無事だ。少なくとも生きてはいる」

「……っ。なにを根拠にそんなことを……」

苛立たしげな問いに、キリエルは淡々と答えた。

「もう殺されているなら、お前はそう言うよ。その方が私を追い詰められる。質問に答えないのは、真実がお前にとって不都合だから。……おおかたエクシールは、アゼルのところにでもいるんだろう？それが安全の証になるかどうかは微妙なところだけど、少なくともお前がエクシールに手を出すことはない。アゼルの機嫌を損ねるわけにはいかないからね。……どう？　当たらずとも遠からずだと思うけど」

「――」

その言葉に、シェムールはむっつりと黙り込んだ。妖しい美貌の真ん中に、不機嫌を示す縦筋が走る。

「……思ったより頭が回るようね。いいわ。口で言ってわからない輩には、別のやり方で教え込んであげる」

褐色の堕天使はそう言うと、ぱちんと指を鳴らした。すると手枷から伸びている鎖が天井に空いている穴へと吸い込まれていき、キリエルを強引に立ち上がらせた。上に滑車かなにかがあって、鎖を巻き取っているようだ。結果キリエルは、両腕を頭上に掲げたひどく無防備な姿勢を強要された。

「……っ」

息を呑んだ。この体勢だと、なにをされても抵抗できないことをことさらに思い知らされる。

「……なにをする気？」

滲む恐怖を心の底に押し込め、鋭い視線をシェムールへと差し向ける。すると――

「決まっているでしょう……お礼よ。この顔を足蹴にされたことに対する、ね」

シェムールは艶然とした笑みを浮かべると、自身の頬を指先で撫でた。先日の戦いで、キリエルに蹴りつけられた場所だ。

「あなたを調教するわ、紛い物の神騎キリエル。二度と生意気な口が利けないように、徹底的に躾けてあげる」

シェムールの顔が嗜虐的に歪む。キリエルはその顔を、静かに見返した。

お礼。調教。言い方は回りくどいが、要するに抵抗できないキリエルを一方的に痛めつけ、傷ついた自尊心を回復したいということか。だとすれば――なるほど、この女狐が考えそうなことではある。

「……調教、ね。それって鞭で叩くってこと？　それとも電流でも打ち込んでみる？　……別にいいよ。好きにすればいい。なにをされようと、私は屈しな――え？」

と、鋭く告げた直後のことだった。キリエルの心臓が、どくんとひとつ高鳴る。続いて全身の鈍痛を上書きするように、不可解な熱が込み上げてくる。その脈絡のない、そして急激な変化に、キリエルは困惑した。

「あ、ぐ……なに、これ……っ。からだ、熱……くて……！」

「ふふ……効果が出てきたようね」

途切れ途切れに呟くキリエルを見つめて、堕天使は妖艶に笑った。

「鞭で打つ？　電流責めにする？　そんなつまらない……いいえ、生温いことはしないわ。あなたが受けるのは快楽による調教。女の身である限り決して抗えない……魔悦調教よ」

言葉を切り、シェムールは続けた。

「あなたが眠っている間に、『素直になれる薬』をたっぷり投与してあげたわ。どんな強情な女でも泣いて許しを請う、特別性の薬をね。……あなたの体はもう、雌豚のそれに成り下がっている。精々喘ぎ悶えて、私を愉しませなさい」

優越感たっぷりに、シェムールは語った。キリエルはそれを睨み返して、鋭く囁く。

「……こ、この程度……どうってこと、ない……！」

「あら、そう？　なら試してあげるわ」

シェムールは楽しそうに唇の端を持ち上げると、キリエルの体を抱きしめるようにして、手を背後に回してきた。妖しい美貌が眼前に迫る。改めて見ると、ぞっとするほど整った顔立ちだった。憎らしい怨敵であることを一瞬忘れ、見惚れてしまうほどに。

そしてその一瞬の隙に、シェムールは次の行動を差し込んできた。アゼルの攻撃を受けたことで戦装束が破れ、素肌が露出した背中を、指でゆっくりと撫で上げてくる。

「う……あ……っ！」

途端にぞくぞくとした快感に見舞われ、キリエルは呻いた。まだ嬌声と呼ぶには拙いが、甘い響きが含まれているのは間違いない。

（……っ。なんで私……背中撫でられただけで……変な声、出してるの……？）

いまの刺激でスイッチが入ってしまったのか、キリエルの体は猛烈な勢いで発情し始めていた。汗がどっと湧き出し、頬を伝ってぽたりぽたりと床に落ちていく。触られてもいないのに乳首が芯を持ち始め、股間からはいやらしい蜜の気配が徐々に顔を見せ始めている。

「ふふ……膝が笑っているわよ。どうってことない、という風には見えないわね」

シェムールは至近距離で、キリエルの反応を嘲笑った。それから、背中を撫で回していた指をつぅと下にずらしていく。するともどかしい刺激が腰骨の上を通り過ぎ、小ぶりで引き締まったヒップにまで至る。

「あ、ぐ……！　さ、触るな！」

敏感すぎる肌の感覚に戸惑いながら、体を必死に捩る。しかし厳重に拘束された不自由な身では、望まぬ刺激から逃げることはできなかった。

「そんなに嫌がられると、かえっていじめ甲斐があ

著者近況　このエピソードの執筆中、キーボードの『K』だけが昇天しました。『快感』が『アイアン』に変換されてしまったら、エロ小説家はお手上げである。
好評発売中！

るわね。ふふ、もっといやらしいところを触ってあげる……」

嗜虐的で艶めかしい囁きが、耳元でぱっと弾ける。と同時に尻を撫でていた魔の手が、キリエルの乳房にそっと触れた。

「随分と貧相な胸ね。まあその分、感度は悪くないのかしら？」

「う、うるさい……勝手なことを……あっ」

反抗的な言葉は、わずかに硬くなっていた乳首を弾かれたことで容易くキャンセルされた。

「あら、やっぱり感度はいいのね。ほら……こうされると気持ちいいでしょう？」

細く繊細な褐色の指が、踊るように乳房の上を這い回った。根元からじっくりと撫で上げたかと思えば、急に乳首を摘まれる。あるいは爪で乳輪を引っ掻いて鋭い刺激を与えたあと、掌で優しく全体を揉まれる……。

「う……くぅぅ……あっ。ん、ふ、はあぁぁ……」

額に汗して、キリエルは甘い喘ぎを漏らした。悔しいがシェムールの愛撫は達者だった。決して痛みや不快感を与えず、淫情を高める動きだけをしてくる。お陰でキリエルの乳首は、完全に勃起してしまっていた。

「こちらはもう準備万端ね。下の方はどうかしら？」

そこでシェムールは立ち位置を変えた。キリエルの背後に回り、火照った矮躯にしなやかな腕を絡みつかせてくる。その手は蛇が這いずるかの如く腹部を撫で降り、徐々に股間へと向かっていた。

「くっ……やめろ、そこは……んんっ」

静止の言葉は当然のように無視された。褐色の魔の手は躊躇いなく、レオタード状に展開した戦装束越しに、キリエルの股間をそっと撫で上げた。

「……こっちも、既に準備はできているようね？」

これ見よがしに掲げられたシェムールの指には、わずかにとろみを帯びた淫蜜がべったりと付着していた。汗だ、などという言い訳は通用しそうにない、明らかな発情の証……。

「少しいじめただけでこんなに濡れてしまうなんて、あなたそれでも神騎？　ああ……そういえば紛い物だったわね、あなた。浅ましい人間の雌でしかないのなら、この結果も仕方のないことかしら？」

「うる、さい……く、薬を盛られてなければ、こんなことには……あうっ!?」

抗弁は途中で打ち切られた。シェムールが股間への愛撫を再開したのだ。戦装束の生地越しとはいえ、なによりも明白な女の部分をねっとり刺激され続けると、声はどうしてもいやらしい響きを持ってしまう。

「あうっ……や、やめ……んんっ」

ぎゅっと内股になり、キリエルはその身を暴れさせた。だがその抵抗はシェムールの嗜虐心を満たすだけで、なんの成果も生み出せなかった。

「無駄よ。諦めて快楽を受け入れなさい」

赤き神騎の股間の上で、堕天使の指が巧みに蠢く。割れ目を丁寧に撫で、蟻の門渡りを指先でくすぐり、クリトリスを探り当ててそっと摘まんでくる……。

「や、やめろ……やめろ！　んん!?　ん、ふ、あぐ……やっ。あん、うぅ……くぅぅっ！」

薄暗い研究室の中に、快楽を拒みたくても拒めない、切ない喘ぎがこだました。

「あら、案外可愛い声で啼くのね。もっと聞かせなさい。もっと激しく喘ぎなさい。その浅ましく淫らな声だけが、私の溜飲を下げるのだから……」

「だ、黙れ……誰が喘いだり、なんか……ひっ。あ、や……ん、んん、あっ」

どうにか絞り出した否定の言葉は、どこか虚しい響きを持っていた。敵の手で望まぬ快楽を叩き込まれることは、これ以上ない屈辱だ。しかし体の火照りは最早、手の施しようがないところにまで至っていた。

「あ……っ、んん、ん、あん……ひぅっ」

シェムールの指が股間をねちっこく嬲るたび、固く閉ざした唇の隙間から甘い呻きが押し出され、ほっそりとした腰が意志とは関係なく淫らにくねる。

「あら……蜜がまた増えたわ。イクのね。いいわ、見届けてあげる。敵の指に弄ばれてアクメを極める、無様な神騎の顔をね……！」

ぬちゅ……ぐちゅぐちゅぐちゅっ！

どうにか刺激から逃れようともがくキリエルの腰を執拗に追って、シェムールは激しく腕を前後させた。その動きはともすれば乱暴にも思えるものだったが、媚薬と愛撫の相乗効果ですっかり出来上がっている淫らな女体は、その刺激から十分以上に快感を汲み上げてしまっていた。

「あひっ、ひぃ……っ!?　あ、ああ、あ、あああああああああっ！」

びくびく、びくんっ！　赤き神騎はその小さな体を立て続けに戦慄かせ、果てた。

（なに、これ……!?　我慢の仕方、わからないっ！　無理矢理……私の意志なんて無視して、無理矢理にイカされた……！）

それはこれまで経験したことのない、悪魔的な絶頂だった。そしてキリエルは不覚にも、その官能に恐怖すら覚えた。無理もない話ではある。いかに気高き神騎といえど、彼女はまだ少女なのだ。媚薬によってブーストされた鋭利な快感を素直に受け入れられるほど、性経験を得ているわけがない。

「ふふ……イったわね」

シェムールは底意地の悪い笑みを浮かべて囁くと、キリエルの股間から手を引いた。すると絶頂によってとろみを増した淫らな液体が、つぅと内腿を伝って垂れ落ちてくる。

著者近刊 『ダンジョン暮らしの元勇者1～3巻』

「あらあら、はしたないことね。まるで粗相でもしたかのよう。私の指は、そんなに気持ちよかったかしら？」
褐色の女狐はくすくすと笑い、これ見よがしに指を擦り合わせ、人差し指と親指の間に糸を引かせて見せた。
「……っ」
キリエルは度し難い屈辱に奥歯を噛み、頬を羞恥で真っ赤に染めた。自らの淫蜜によって描かれたその卑猥な直線は、なによりもキリエルを辱めるものだった。
「さあ、調教はまだ始まったばかりよ。次はもっと激しくイカせてあげる」
一方的に宣言して、シェムールはこちらに手を伸ばした。まだ絶頂の余韻が残った敏感すぎる体を、好き放題に愛撫される。
愛液の伝う内腿を撫でられ、ぐっしょりと濡れた股間を再び激しく擦られる。しかも今度は、最も敏感な女の弱点であるクリトリスを、重点的に責められた。
「あぐ……ひぅ、あうぅぅっ。そこ、やめ……だめ、だめ……っ！」
あっという間に追い詰められ、キリエルは淫らに腰をくねらせた。めいっぱいに腕を暴れさせ、どうにか刺激から逃げようと足掻く。だが彼女を拘束している鎖は依然として頑丈で、がちゃがちゃと硬質な音を立てるばかり。
（もう、だめ……また、イカされる……！）
と、彼女が二度目の絶頂を極めてしまいそうになった――その瞬間だった。
「――はい。ここまで」
シェムールはそう言って、愛撫の手をぴたりと止めた。すると途端に、キリエルの体はパニックに陥った。心はこの快感を恐ろしいものと感じているが、火照り切った体にとっては極上の甘露だ。彼女の肉体は、砂漠で見つけたコップ一杯の真水を飲む直前で取り上げられたような、強烈な飢餓感を訴え始めていた。
「あ、う……うぅぅ……」
顔を真っ赤に染め、抑えきれない衝動を内腿を擦り合わせることでどうにか堪える。
目の前がちかちかした。一気に思考が鈍くなる。
「ん、くぅぅ……っ。んん、ん、ん……は、ぁぁぁ……！」
思い浮かべていた罵声は舌に乗ることもなく消えて、呻きだけが零れた。奥歯を噛みしめても漏れてしまう、切ない呻きが。
「うふふ……いい顔よ、キリエル。まるで物乞いのよう」
「……っ。そんな顔、してない……！」
「あらそう？」
反射的に口にした抗弁を、シェムールは鷹揚に受け止めた。それからすっと手を伸ばし、キリエルの股間を弄る。
が、今度の愛撫はひどく緩やかで、刺激の少ないものだった。フェザータッチで割れ目を撫で擦るだけで、決定的な刺激は与えてこない。もっともその程度の刺激でも、いまのキリエルはたちまち絶頂しそうになってしまったが。
（イク……今度こそ、イカされ――）
少ない刺激を貪るようにして、キリエルはまたも絶頂に手をかけた。が、やはりその瞬間に、愛撫の手がぴたりと止まる。
「あ……」
思わずぶるりと身を震わせて、キリエルは切ない声を漏らした。いまの声には、自分でもはっきりわかるほどの無念が滲んでいた。いまのは……無意識に快感を求めてしまった、はしたなく情けない……雌犬の鳴き声だった。
「……ふふ」
もどかしい愛撫に身悶えするキリエルを、シェムールは意地の悪い笑みを浮かべてじっと見ていた。それは赤き神騎に強い屈辱を抱かせたが、褐色の堕天使が愛撫を再開すると……。
「あ……あ、あ……ああ……」
憎らしい女を睨もうとした目は、すぐに涙目へと変じた。どれほど悔しくとも、憤ろうとも。肉体に快感が走れば、意識の全てはそちらに向かう。
「あ、は……はぁっ。ん、く……あと、少しなのに……！」
やがてキリエルは無意識のうちに、自ら腰を揺するようになった。少しでも刺激が強まるように、シェムールの指を迎えに行く動き。だがシェムールは絶妙な力加減で腕を引き、一定以上の刺激を与えないよう、完璧にコントロールしていた。
そんなことが数分も続いたあとには、キリエルの足元に大きな水溜まりができていた。絶えず湧き出てくる愛液が作る、淫らな水溜まり。
「イキたい？」
と、不意にシェムールが囁いた。彼女はキリエルの恥丘を指先で嬲りながら、そっと続けてくる。
「私に絶対服従すると誓えば、いくらでも気持ちよくしてあげるわ。逆に言えば……強情を張り続ける限り、あなたは絶対にイケない」
「……だ、れが……んっ、く……そんなこと、言うもんか……」
恥丘に走るくすぐったさ混じりの官能にびくびくと反応してしまいながらも、キリエルは気丈に言葉を返した。
高まり続ける絶頂への飢餓感は確かに耐え難いものだ。誘惑に乗ってしまえばどれほど楽かとも思う。だが……。

粘獄のリーゼ
淫罪の宿命
第8話　魔城
ぶほほ それでは最後の仕上げにいきましょう
このバケモノ！
まだ何かするつもり!?
つゆだく美女にエッチな味付け!!
ひゃん
ど…どこに入れ…！
ビクッ
添える野菜も美味しく仕上げないといけませんからねぇ
こちらのシロップで味付けいたしましょう
漫画 COMIC 楠木りん
原作 ORIGINAL 竜胆

ひあああぁ！強…んん！
くちゅくちゅ
ビクッビクッ
ひぃ…やっ抜いてぇ
このお野菜で綺麗な女体盛りにしてあげますね
ズプ
ズプ
ドロ
ほらほらこのぷっくり膨らんだお豆を舐めてあげますからもっとシロップをお出しなさい
ふひっ!? そこ…舐めんんっ！
んふふこんなに硬くなっていやらしいお豆ですねぇ
ひっ!?
ベロ
ベロン
今クリ舐められたらぁ…
ダメ…快楽に逆らえない！
ぷるる
ベロン

んほォ♥イクッ♥

いいですぞぉ
その淫らな
イキっぷり
シロップも
申し分ない

びくっ

びくっ

んぅふふ
これは
大量の淫蜜を
吹きましたなぁ

くっ…
動けるなら
こんな豚
すぐに…

！

動く…
動けるわ！

さて
もうひと
手間を…

ダン
調子にのってんじゃないわよ!!
この…
ブロン
ブチ
うう…薬の量が足りなかったか…
ゲオ
神の名のもとに解き放て第七の刃の使徒
ガシッ!?
蝕め第七の刃 蝕葬の使徒 エイベリエル!
無駄ですよぉ 私の体に刃は…
ズバッ
じわ?

ビシャ!?
ミシミシ
これは…毒!?
第七の使徒の力はもっとも忌まわしき呪詛の刃
ドロドロ
ぐふふ…これ…は
してやられましたなぁ…
ぐいっ
キョロ
あとは…
あった！
急がないと!!
……
…この先ね
惑溺王マスティマート
残る刃はひとつ…

悪に捕まり、抗う術のなくなった少年ヒーローが
女怪人たちの性教材へと変貌を遂げていく!
ブロッサム&デイジー
Blossom and Daisy
悪の教材となった少年ヒーロー
小説/NOVEL 高岡智空(たかおかちから)
挿絵/ILLUSTRATION インフラトン

人類でありながら、人類とは異なる方法で自身を未知の存在へと昇華させた彼女たちは、自らを『進化人類』と呼称し、旧人類の生活及び繁殖、繁栄のすべてを管理すると宣言し、組織立って反旗を翻した。

対する人類は、心と身体が未成熟——だからこそ、進化人類に対応することができる少年らを特殊スーツによって超人たらしめ、日本各地で暗躍する彼女らの勢力範囲へと派遣し、その浸食を食い止めんとする。

首都圏より僅かに離れたこの学園都市においても、学園と都市運営を任される市長よりの救援要請を受け、二人の少年ヒーローが派遣されていた。都市中心部にある特殊な学区がエボリュートらに掌握されており、このままでは学園都市のエネルギー運用が困難になると、最優先での解決を依頼された形である。

かくて——彼らは街中のエボリュートたちを退け、あるいはその目を掻い潜り、ここを任されたエボリュート部隊が根城にしているという、巨大な学園校舎への潜入を果たした。

そう、成功したはずなのだ——。

◇

（どうしてっ……オレたちは確かに、市長から聞いた通り……あいつらの裏をかいてやったはずだろっ!?）

恨み言と戸惑いを半々に、瞳を怒らせた少年ヒーロー——マイトブロッサムは、校舎内の普通教室にて、教卓の上に拘束されていた。市長からもらった情報に従い、監視の手薄な場所から潜り込み、ボスがいると聞いていた教室に飛び込んだ——まではよかったが、待っていたのは妙なガスによる歓迎。

記憶があるのはそこまでで、それから目が覚めると、こんな屈辱的な格好で拘束されていたというわけだ。

エボリュートの開発した特殊金属の枷を膝と足首に填められ、大きく開かれた状態から閉じられないよう、同じ材質の金属棒で固定されている。両腕も同じ金属枷を填められ、完全な無抵抗状態を強いられている状況だ。

そんな格好で、ちょこんと教卓に腰かけさせられたショートカットの少年は、自慢の特殊スーツも、ズタズタに引き裂かれてしまっている。そのせいで、スーツの性能は十パーセントほども機能しておらず、枷を破壊することはおろか、彼女らのやることには、一切の抵抗ができないということだ。

（自力脱出は無理か……けど、捕まったのはオレだけみたいだな。あいつが無事なら、まだ可能性は——）

共に潜入し、囮を務めてくれていた相棒——グラストーンデイジー。ここにいない彼がうまく逃げ果せているなら、助けに来てくれるはず。それまで時間を稼ぐのが、自分の役目だ。

「難しい顔をして、なにを考えているのかしら、ヒーローのボウヤ？」

そんな無抵抗の少年に、眼鏡をかけたブロンドの女性が、しなだれかかるように身を寄せ、細くしなやかな指先を、剥きだしになった生白い肌へねっとりと這わせてゆく。

「本当、いい格好だこと♪　確かお名前は——マイトブロッサムくん？」

舐めるような指の刺激に肌を擦られ、くすぐったさにピクピクと身を震わせながら、ブロッサムは女の呼びかけに応えるように視線を向けた。

（馴れ馴れしく呼ぶなっ……くそっ、お前は何者だっ、答えろ！）

その挑戦的な視線から思惑を読み取ったのか、女は微笑んで答える。

「そうそう、自己紹介がまだだったわねぇ？　初めまして、ブロッサムくん……私の名前は、マルゲリット♪　エボリュートの祖にして、君たち人類の敵……と名乗るべきかしらね？」

（こ、こいつがマルゲリット——）

レディ・マルゲリット——超能力を持つ人類として生まれ、類まれな頭脳を誇った彼女は、能力と技術、知識のすべてを動員し、自らに改造手術を行い、人為的な進化を果たしたと宣言した、第一のエボリュートだ。彼女はその後もエボリュートとして、様々な技術を開発し、科学を発展させ、彼女に続いてエボリュートとなった者たちを従えるようになった。

それは現在も変わらず、手術をした二十代の頃の肉体を維持したまま、彼女はエボリュートのトップに君臨している。成人男性の手からもこぼれそうな、大きな乳肉がムッチリと浮かび上がったタイトなボディスーツ、そこに扇情的な身体のラインを見せつけ、上に白衣を羽織った姿は、女帝というよりは悪の科学者といった様子だ。

そんな彼女がまさか、こんな最前線とも言える場所にいようとは——。

（ここで会ったが百年目だっ……マルゲリット、これを外しやがれ！　正々堂々、俺と勝負しろ！）

敵の首魁を目にし、意気盛んに暴れるブロッサムだったが、彼の叫びはまるで言葉にならなかった。

「んふぅっ、ふうっっ、ほぉっっ！」

彼女に向けられた言葉は、咥えさせられたボールギャグによって、聞き取れない呻きへと変えられてしまう。そして、少しでも色事を知る者であれば、そんな少年の叫びも喘ぎ声のように思えただろう。

実際、それを見た金髪美女は、少年の反応にうっとりと視線を細め、艶めかしい表情を浮かべるとともに、身体を芯から熱く火照らせていた。

「ふふ、反抗的な態度だけれど……その強気がいつまで持つか、楽しみだわぁ♪　せいぜい長く抗って、立派な教材として役目を果たしてねぇ？」

（教材だって……くそっ、こいつら……いったいなに考えてやがるっ！）

そんなことを思いつつも、彼女の指がスーツの傷をさらに広げ、胸元や下腹部を撫でくり回すたび、身体は電気でも流されたように痺れ、拘束具をカチャカチャと鳴らし、身体が揺れる。

そして――その姿はマルゲリットだけではなく、それぞれの席に着いてこちらをニヤニヤと眺めている、大勢の女子生徒たちにも晒されていた。彼女らは捕らえられた学園の生徒たちだと思っていたのだが、その落ち着いた態度や自分を見ての反応からして、そうではなかったらしい。むしろ――。

「それでは、エボリュートの将来を担う皆さんには、この哀れな捕らわれのヒーローくんを使って、我々が繁栄していくための手段を教えましょう」

（やっぱり、こいつらもエボリュートかっ……オレの力を使って、こいつらを成長させようってのか……っ）

彼女らも元は人間だったはずだが、その特殊な能力や手術により、エボリュートとして覚醒してしまっているようだ。まだ幼いため戦う力はないようだが、この学園はどうやら、彼女たちの育成の場となっているらしい。

「さて――エボリュートがさらなる繁栄を遂げるために、どうしても欠かせないのが牡との繁殖であるということは、すでに説明しました」

そうしてマルゲリットが口にしたのは、現在は人間からのみ生まれる、進化の素質を持った人類――エボリュート素体とも呼ぶべき存在を、自分たちが男と繁殖することで生みだそうという理論だった。

「我々は幸いにして、人間の牡から見て非常に魅力的な外見を持つのが特徴となっています。ゆえに、牡を外見で誘惑するのは造作もないこと……ですが、それだけで繁殖を為すのは難しいこと。そしてなにより、彼らを我々の虜とすることは、同時に旧人類の繁殖を妨げることにもなるのですから、なによりも早く、その手段を覚えなくてはなりません。いいですね？」

教師然とした女帝の説明に、教室中から女子生徒の『はーい』という従順な答えが返った。

（くっっ……やっぱり、本部で聞かされたのは本当だったのか……）

エボリュートたちの目的は、旧人類を支配下に置くこと――そして、そのための第一段階として彼女らは、人間の牡を繁殖対象とし、彼らと子作りを行うことを最優先事項としているらしい。そうした行為の経験はないが、さすがにブロッサムも、性行為という概念くらいは理解している。

だが、自分たちと外見が似ているとはいえ、エボリュートはすでに道を違えた敵なのだ。そんな相手に性的興奮など覚えるものかと、ブロッサムは口枷を噛み締め、瞳をツリ上げる。

「では――さっそく今日も実技指導をいきましょうか。前回と違い、女への興奮をさほど自覚していない、とされているヒーロー……彼をどう虜にするか、きちんと学んでくださいね？」

（大丈夫だ、耐えられるっ……そんなことより、なんとか逃げる手段を考えないと……くっ、うぅぅぅっ……）

なんとか抵抗を試みるブロッサムだったが、スーツの力を反映しない、華奢な身体とか細い腕では、金属枷を外すどころか軋ませることすらままならない。そんな非力な獲物を見つめ、ニヤニヤと笑いながら、女はヒーロースーツで唯一傷を負っていなかった、股間の布を摘み上げ、そこに手術用メスのような刃を宛がった。

「んふぅぅっ、ふおっっ！」

「ふふっ、大丈夫よぉ、傷つけたりしないから……あなたの大事なおちんちんを、拝ませてもらうだけよ♪」

急所に刃を突きつけられ、焦ったブロッサムが思わず呻いたが、そんな反応をクスクスと笑い、女が囁く。

（なっ……なに言ってやがるっ⁉）

相手の思惑を聞かされ、その屈辱にカァッと顔を赤くするブロッサム。けれど、それだけではなんの抵抗にもならず、スーツの股間は呆気なく引き裂かれ、その奥からポロンと、情けなくペニスが引きだされてしまった。

「はい、これがヒーロー様の大事なチンポですよ？　皆さん、じっくり観察してあげましょうね……ふふっ、でないと見えないでしょうから♪」

嘲りを含めた女の言葉に、教室中からドッと笑いが巻き起こる。それと同時、少女たちの侮蔑の囁きまでが、あちらこちらからヒソヒソと響いた。

「あはっ、ホントにちっさぁい♪」

「後ろの席だと見えなくない？」

「前の男の人は、もっと長くて太かったよねぇ？」

「うんうん、ズル剥けだったぁ」

「じゃあ、あれって――」

そんな少女たちの、好奇と蔑みの視線を浴びせられ、どうしようもない羞恥にブロッサムの顔は真っ赤に染まり、全身が熱く火照らされてゆく。

「いわゆる――短小ってやつ？」

「粗チンとも言うよねぇ？」

「しかも皮被りだよ、包茎だよ♪」

（うっぐぅぅぅっ……うぅっ、うるせぇっ、笑うなっっ……）

自分よりも年下であろう少女たちに、他の男のモノと比べられての短小認定を受け、消え入りたくなるほどの恥辱に包まれる。ブロッサム自身、他の同級生に比べて自分のペニスは小振りなのではないかと、密かな劣等感を抱いていた。だが、それだからこそヒーローに相応しいのだと、政府からの要請を受けてヒーローになったことで、その感情は薄れていたのだ。

だが、それをここにきて、年下の少女たちに指摘されるばかりか、明らかに馬鹿にされ、嘲られたことで劣等感が甦り、痛いほどにコンプレックスを刺激されてしまう。

（やめろっ、笑うなぁっ……うくっ、うぅぅっ……見るなぁ……）

懸命に腰を捩り、脚を寄せて股間を隠そうとするが、特殊合金の棒で無理やり開かされた脚は、どう足掻いても閉じることができない。その根元からポロリとこぼれたペニス――少年の指よりも短い肉棒は、身を捩るたびにプ

ルプルと惨めに震え、それがより、少女たちの笑いを誘うばかりである。
「あはははは、揺れてるっ♪」
「なにあれぇ、ダンスかなぁ？」
「かわい～、赤ちゃんみたい！」
「がんばれ～、がんばれ～♥」
「ほ～ら、ワンツー、ワンツー♪」
煽るように手を叩き、囃し立てる言葉を聞いて、もはやブロッサムの肌は茹で上がったように赤く染まっていた。そうして、ひとしきりの辱めを受けたところで、ようやくマルゲリットが彼女たちを嗜めるように、パンパンと手を叩いて注意を引く。
「はいはい、皆さん静かにね。この頃の少年というのは、成長にもバラつきがあるものなのよ……確かに、平均よりは随分と小さいけれどねぇ？」
嗜めるどころか、少女たちの嗜虐感情を煽るようなマルゲリットの発言に、教室内はさらなる笑いに包まれていった。もはや暴れる気力も萎えさせられ、真っ赤になったブロッサムは唇の代わりに口枷を噛んで俯き、プルプルと小さく震えることしかできない。
そんな少年ヒーローの姿に、さすがに苛めすぎたと思ったのだろか。マルゲリットは優しく髪を梳いて頭を撫でながら、女子たちの講義を続ける。
「んんっ――とはいえ、男性器としての機能があれば問題ないわ。それを確認してみましょう……ハツネ」
そう言って、マルゲリットは教室の入口へ目を向け、そこに佇んでいた一人の女性を呼びつけた。
ハツネ――そう呼ばれた女は、黒髪を短く切り揃え、ドールのような印象を与える女性だった。ヘッドドレスやエプロンまで含めた、いわゆるメイド服に身を包んだ彼女は、眉一つ動かさないクールな面持ちで、落ち着いた雰囲気を見せながらブロッサムを一瞥し、マルゲリットへ向き直る。
「はい、いかがいたしましょう」
「男性機能の確認をなさい、方法は任せるわ。あと――せっかくだし、サイズの計測もしてあげなさい」
彼女もまたエボリュート、それも組織のトップであるマルゲリットに直接仕えるほどの、信頼置かれる古参エボリュートなのだろう。命令を受け、素直に頷いた忠実なメイドは、教卓の後ろ――つまりブロッサムの背後から抱きつくように腕を回し、手袋を嵌めた手を剥きだしの股間へ伸ばした。
「失礼いたします」
「んふむぅぅっ、んぉっっ……」
やめろ――と叫ぶことも許されず、萎えたままの短小肉茎が、スベスベとしたサテン手袋の感触に摘み上げられる。そう、握られるのではなく、指先で摘み上げられるという、男のプライドを傷つけていく扱いだ。
「計測開始――終了、非勃起時のペニスサイズは、同年代平均の半分より短いようです。正確な数字については、名誉のために伏せております」
（うっ、あっ……うぐっ、うぅぅっっ……くそっ、なんてことっ……）
フォローのつもりだったのか、それとも遠回しな侮辱のつもりだったのか。いずれにせよ、ハツネの言葉を聞いた瞬間、また女子生徒たちには笑いが広がり、さすがに堪えきれなかった様子でマルゲリットまでが小さく噴きだし、嘲笑をもらしていた。
「ぷっ……くっ、ふふっ……そう……ふふっ、くふっ……だけど勃起すれば少しはマシなんじゃないかしら？」
「お待ちくださいませ」
ハツネは淡々と呟いて応えつつ、ペニスを摘んだ指を小さく動かし、フニフニとその柔らかな肉茎を揉みしだき始める。包皮越しのペニスを逃がすことなく、絶妙の力加減が根元から先端へ、緩やかな扱き運動とともに、甘い快楽を流し込んできた。
（あぐっ、うぅっっ……や、やめ、ろっ……あうっ、んっ、んぁぁっ……）
サテン生地の滑らかな感触と、ハツネの手技による心地よい刺激が、ペニスを尿道ごと捏ね回し、そこへ注ぎ込まれる血流を激しく脈打たせる。
いけないと思いつつも、牡を刺激し、発情させようとする女のテクニックに、少年の肉棒は瞬く間に反応してしまい、彼女の指の間でムクムクと鎌首をもたげ始めていた。僅かながらも圧力を加えている指を押し上げようとする、ブロッサムの勃起反応に気づいたハツネは、背後から覗き込むように少年の顔を見つめようとする。
敵の手で勃起させられようとしている――その気恥ずかしさからブロッサムが目を背けようとすると、代わりにとばかり、ハツネは無防備な耳朶へ唇と舌を伸ばした。
「……勃起、し始めていますね。恥ずかしくないのですか、敵に捕らえられての辱めで、このような反応をみせてしまうなんて……みっともない」
「んくっ、おっ、ほぉぉっ……」
その囁きと浴びせられる熱い吐息、そして敏感な耳穴を穿るようにツプリと押し当てられた舌のヌルつきを受けた瞬間、少年の我慢は容易く崩壊させられてしまった。シコシコと小さく上下する指の間で、完全に屹立してしまった肉棒はピンと真上を向き、扱かれるたびに小さく跳ねて発情を晒す。
「――勃起、完了いたしました」
「あら、思ったより早いわね？」
「はい。触れる前より興奮を示しておりましたので、少しそのことを意識させただけで、呆気なく勃起してしまったようです。情けないことに」
（うくっっ……あっ、はぁっ……か、勝手なこと、言いやがってぇっ……あはぁぁっ、んっ、んんぅっっ……）
言い返したいのに口は塞がれ、しかも彼女の言葉を肯定するように、その指の中で完全な勃起を見せていては、どう反論しても説得力は皆無だ。その悔しさに顔を真っ赤にし、せめてもの抵抗にフーフーと息を荒くして周囲を睨むも、その場の女たちには、抵抗で

著者近刊 『性感淫魔エステ２ 種付けリフレはじめました』『抜きコキハニトラエステ』『光魔少女メイ　拘束魔具の虜』『性感淫魔エステ　搾精コースはじめました』他
好評発売中！

なく興奮にしか見てもらえない。
「あらあら、すっかり出来上がっちゃったみたいね……サイズはどう？」
「はい。勃起時サイズは平均の半分より、少しばかり長いようです。太さも同程度に持ち直しますので、勃起率はそれなりかと。もちろん、すべて平均未満に変わりはありませんが」
「ふぅん……そうなの」
つまらなそうに呟いたマルゲリットは、ハツネの指に摘まれた小振りの勃起を見下ろす。そこにあったのは彼女の言葉通り、ハツネやマルゲリットどころか、教室にいる女子生徒の手の平どころか、指二本のリングで掴めてしまうほどの細い肉塊。長さにしても、しっかりと手で覆えば見えなくなってしまう、ヒーローらしさなどまるで感じられない、粗末なペニスだった。当然、包皮にしても完全に剥けてはおらず、ピンク色の亀頭を半分ほどしか露出させていない。無数の男のペニスを見てきた女帝にとって、それは女として見下すべき牡の象徴であり、弄び（もてあそ）と嘲笑の対象にすべき玩具だった。
「ヒーローだから少しは期待していたのだけれど……結局、平均未満の残念チンポくんだったのねぇ？」
「んっふぅぅっ……ふぁっ……」
ハツネが舌を絡めるのと反対の耳に、マルゲリットがフゥッと吐息を注ぎ込む。その刺激に脳髄が震え、背筋が思わずビクついてしまい、意図せぬ甘い喘ぎがもれた。当然、掴まれた肉棒もヒクヒクとはしたない反応を示し、教室内のすべての女の視線と、それがもたらす羞恥に晒される。
「……変態、ザコチンポ。残念なのは大きさだけじゃないのよ？　敵に愛撫されて簡単に勃起する、節操なさと堪え性のなさも、ざ～んねんなの♪」
（う、うる、さっ……あっ、んぅっ、あはぁぁっっ……はぁぁっ……）
揶揄する言葉にキッと瞳をツリ上げたのも束の間、ハツネがそうしているように、マルゲリットの舌が生き物のようにくねって耳朶を舐める。その動きが耳骨を撫でた瞬間、濡れた音と熱い感触に腰が浮き、金属枷をカチャリと鳴らして、股間が突き上げられた。
「んふぅっ、おっ、ほぁぁっ！」
「んぇろっ、れろっ、じゅるぅ……」
ブロッサムの声が甲高く響いたのに気をよくしたか、耳穴に突き立ったハツネの舌が、それを塞ぐように大きく広げられ、耳の表面にねっとりと唾液を塗り広げてくる。一度ではなく、二度、三度と往復する円運動は、彼女のむしゃぶりついた耳全体を覆い、蕩（とろ）けるような快感と甘い刺激を生んだ。
「あらあら、もう腰を使っちゃってるじゃない……これじゃ耐久力にも期待できないわねぇ？　あむっ、ちゅぅ……べろおっ、れろぉぉんっ……」
（おひっ、いっ、ひあぁぁっ……やめっ、ろぉっ……それっ、やめ……んひっ、いひっ、ひぐぅぅっ……）
左右からの耳舐め愛撫と共に、サテン手袋に包まれた指先で、硬く膨らんだ牡肉が容赦なく扱かれてゆく。これまでに、自宅で幾度も味わったことのある感覚、その何倍もの心地よさを下腹部に注ぎ込まれたブロッサムは、抵抗したいという気持ちと裏腹に、夢見心地といった様相で、瞳をトロンと蕩けさせている有様だ。
「うわぁ～、キモチよさそ～」
「え、あんな準備運動程度で？」
「マルゲリット様の言う通り、本当にすぐお射精しちゃいそうですねぇ」
「あははっ、それはないってぇ♪」
「射精させようともしてないのにイッちゃうって、オス失格じゃん♪」
口々に囁かれる嘲りは、すでにそうと決めつけたような感覚で、ブロッサムの弱みを的確に、面白半分にくすぐってくる。だが、幸いにもその囁きのおかげでハッと正気に戻れたブロッサムは、敵の前で無様を晒してなるかと、枷を噛み、括約筋を引き締めた。
「ふふっ、徹底抗戦ね……いいわ」
一瞬――ニヤついていた女帝の瞳が眼鏡越しにもわかるほどの冷たい輝きを放ち、その切れ長の視線で、ブロッサムを睨みつける。直後、彼女の表情は甘く艶めかしいものに戻っていたが、睨まれた瞬間に大きく跳ねたブロッサムの鼓動は戻ることなく、その妙な高鳴りを響かせたまま、全身に火照りと高揚感を広げていた。
（いま……睨まれた瞬間、ドキッて……び、ビビったってのか？　そんなわけねぇ、オレは――くぅんっっ!?）
考え事を中断させるように、ハツネの指先に力がこもった。
「それじゃ、射精量も確認しておきましょう……ハツネ、やりなさい」
「はい。それではブロッサム様、失礼いたします……んちゅぅ……」
耳の穴を再び舌先に塞がれ、レロレロと容赦ない愛撫が舐め穿る。熟れた果実を思わせる、ドロドロに濡れた、熱い粘膜刺激。それが脳に直結する穴をくすぐる刺激は、一瞬にしてブロッサムの牡欲を盛り上げ、指二本で挟まれたペニスをさらに硬く、ガチガチに勃起させていった。
（あひゅっ、はっ、はひぃぃぃ……なん、だ、これぇぇっ……耳、ヤバッ……あぐっっ、くぅぅぅっ！）
ネルンッ、ヌリュゥッと舌先が上下にくねり、耳奥にピチャピチャとくぐもった水音が流れ込む。彼女の指はしっかりと肉棒を摘みつつも、マルゲリットの指示を受けてから、すぐには動きだしていない――だというのに、耳を舐め上げる愛撫だけで、ブロッサムはいまにも牡恥を晒してしまいそうな快楽に包まれ、腰を浮かせていた。
「べぇろぉぉぉっ……ぬぇろっ、じゅるっ、くちゅっ、れろぉぉんっ……んっ、れろっ、ちゅぱぁ……そぇれは、硬さも限界になってまいりましたようですので、扱かせていただきます」
（っっ……ま、待て、いまは――あひっっ、いひぃぃぃっっ!?）

フハハハハハ！
ATC銀行
銀行強盗だ――!!
この銀行の金はすべて我らダークシャドウが頂いた!!
恐れおののくがいいわ！
愚民共よ
ヒーローのいる世界で悪の栄えたためしなし――？
待てい！
何っ!?
暗黒女将軍
ダークジェネラル
襲来！
漫画 COMIC ぱふぇ
最新単行本
『Fallen Justice ――正義失墜――』好評発売中！

それ以上の悪事はオレが許さない！

覚悟しろ！Dジェネラル

スーパーヒーロー着地

フン…まだ名前も付いてない

新人ヒーローごときが

ドッ

ゴッ

粋がるんじゃないわよ!!

バッ

必殺
キィィィィ
ゴゴゴ
ドカーン!!
ほう…やるじゃないの
ならば私も本気を出さなければ
ならないようね!
ブッ
後悔スルナヨ…
ゴゴゴゴゴゴ
ヒーローオオォ!!

ぐ!!
くっ
き気になって…

ぐぁあ
ッッ
あーらら ちょーっと 本気出したら このザマ？
ぐッ…
あああ！
くくく 良い声だ
DG様が 相手する程では なかったわね
もっと お泣き！
く…そっ オレはまだ 負けてない！ 放せ!!

ならもう一勝負してあげる♪
うあぁああッ!!
ほーら元気になるおクスリよ
くッや…め
おやおや坊やと思っていたけど
なにをする気だ!?
あの薬を使うとね…昂っちゃうのさ♡
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ココは一人前以上じゃない
責任をとって
満足するまで相手なさい♡
プちょぉ

淫虐の女指揮官
レミリアール
「あなた達をわたくしのおもちゃにしてあげる！」
待ち受けるは残忍なる悪婦!!
小説 NOVEL 氷室凛子（ひむろりんこ）
挿絵 ILLUSTRATION 馬克杯（まぐかっぷ）

［この小説には分岐が設けられています。シーンごとに１～７の番号がふられていますので、シーン１の末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。］

【シーン1】

時は現代。場所は日本。
繁華街が華やぐ一方で、今宵も悪が人々を襲っていた。
「いやあああ！　ザイグローブよぉおお！」
「逃げろぉ！　女は早く逃げるんだぁ！」
とある路地裏より、そんな叫び声が聞こえてくる。
「あははは！　愚かな民衆よ、跪きなさい！　ザイグローブの女幹部――レミリアール様にね！」
逃げ惑う民衆に、高慢な声が降り注ぐ。
悪女。その声の持ち主は、ひと言で表すならそんな出で立ちをしていた。
髪は漆黒。腰まで届くロングヘアーは、夜の風になびいている。
対照的に肌は純白。きめ細やかで、舐め回せば極上の快楽を得られそうだ。
ここまでなら普通の女性と変わらないのだが、しかし彼女を悪女たらしめるのはやはりその格好に他ならない。
引き締まったボディはほとんどが露出されており、極小マイクロビキニが乳首と陰部をギリギリ隠すのみだ。Gカップ爆乳は歩く度にぶるるんと揺れ、男のペニスを挑発している。惜しげもなく晒された尻肉と陰毛も、情欲を加速させているのだろう。
一方で、派手な装飾の施されたグローブやブーツ、頭部のアクセサリーからは威圧的な雰囲気が醸し出されている。そして何より、印象的なのがその顔だ。
ぱっちりとした瞳に整った鼻梁。間違いなく美しい。だけどその表情は民衆の悲鳴により笑みに変わり、艶めかしい唇からは傲慢な嗤い声が放たれる。
人々の平和を脅かす悪の科学組織『ザイグローブ』。その女幹部の名に恥じない残虐非道のレミリアールの姿がそこにあった。
「さぁ怪人たちよ！　女を手当たり次第に攫ってきなさい！　邪魔する男は殺してもいいわよ！」
「「イェエエエエス！」」
レミリアールの指示により、ザイグローブの下っ端戦闘員や、戦闘用に身体を改造された怪人たちが街に解き放たれる。世界征服を目論むザイグローブは、こうして定期的に街に繰り出しては女を拉致しているのだ。怪人を産ませる苗床にするために……。
「いやあああ！　たすけてぇえぇ！」
「や、やめろ！　俺の彼女に手を触れるな！」
逃げ遅れてしまったのだろうか。まだ若い、十代後半であろう女が一人、怪人に捕まってしまう。彼氏と思しき人物が慌ててたすけに行こうとする。しかし、その手が彼女に届くことはない。
その理由は、戦闘員たちに取り押さえられたからではない。
「邪魔よ。男はとっとと死になさい」
「ぎゃあああああ！」
腰に携えた剣をレミリアールが抜いた次の瞬間。なんと彼女は、ためらいもなく男の顔面に突き立てたのだ。当然、彼氏はすぐに絶命してしまう。
「きゃあああああ！　な、なんてことするのよ！」
「あはは！　別にいいじゃない、こんな弱そうなちんぽの持ち主なんて。あんたはこれからわたくしたちのアジトで、毎日レイプされるんだから。彼氏のことなんて思い出せないくらいに陵辱してあげるわぁ……あはははは！」
「ひ……ひぃいい……っ」
返り血を浴びるレミリアールは女に苗床宣言をしながら、高笑いする。
その邪悪な笑みに、民衆はもちろん、部下の怪人や戦闘員ですら恐怖を感じていた。この残虐な姿こそが、組織で彼女が最も恐れられている要因なのだろう。
「さぁて怪人たち。まだまだ恐怖の夜は始まったばかりよ。今日は最低でも三十匹のメスを拉致してきなさい。できなきゃ、あんたらを豚のエサにしてあげるからね！」
「ヒ、ヒィィイイイッ！」
レミリアールの指示により、怪人たちは慌てふためきながら夜の街へと駆け出してゆく。それを見た民衆は逃げ惑い、パトカーのサイレンも聞こえてくる。だけどレミリアールは動じない。強大なザイグローブの科学兵器の前には、国家権力ですら太刀打ちできないからだ。
「さてさて、部下がメスを集めてくるまで暇だから、その間にあんたをいたぶって遊ぶこととするわ」
「ひ、いやあああ！　お願い、たすけてぇえぇえ！」
目の前で彼氏を殺されたばかりのメスに、しかしレミリアールは容赦しない。
それどころか、むしろ今がチャンスとばかりに陵辱を開始する。
「ほら、そこの戦闘員たち！　こっちにきてちんぽを出しなさいよ！」
「は、はい！」
近くにいた部下を数人呼び寄せ、当たり前とばかりにペニスを露出させる。
そうなればあとは単純。メスを犯すのは当然とばかりに強姦させるのだ。
「さあ、その肉棒をぶちこんでやりなさい。弱いメスは苗床だと教えてあげるのよ」
「あ、あ、あああああ！　いやあああ！」
ズブチュ！
ズブズブズブブ！
戦闘員のペニスが突き挿さると同時に、メスの心地よい悲鳴が響き渡る。絶望と怒りと屈辱の混じった、悲しみの叫びが。
だけどレミリアールにとって、女の悲鳴は魅惑のメロディでしかない。
「さぁ次よ！　そのうるさい口もペニスで塞いでやりなさい！」

著者近況　愛用していた近所のレストランが二軒連続で潰れました……。いつ行ってもガラガラだったので重宝していたのですが、だからこそ潰れたのでしょうね。

「は！」
「な、ま――ふぐうううっ!? おぐふううう……っ！」
遠慮など微塵もない。
泣き叫ぶメスの口に、強欲男根が勢いよく突っこまれる。臭いカウパーが口内を支配し、汚い恥垢が喉奥へと押しこまれる。熱を持った雄肉棒が唇を、舌を、蹂躙する。陰毛がメスの鼻に入りこみ、悪臭が脳へと突き抜ける。顔面を男性器に支配されるメスは意識が飛んでしまいそうだった。
だが、レミリアールは陵辱を止めようとはしない。
「その状態でピストンしまくりなさい！ 先に精液を出した方が勝利よ！ 負けた方は罰として骨をへし折ってやるわ！」
「ひ、ヒィイイイ！」
部下への愛情など一切なし。
そんな命令を下すレミリアールのせいで、戦闘員は必死に腰を振り、それに応じてメスは膣を、口を、陵辱される。
「はぐ……っ！ ほご！ おぼ、おぼほぉおおお!!」
パンパンパンパン！
「ぬちゅ……ちゅぱ……っ！ んぐちゅ……じゅぼ、ぼ、ほぼおおお!?」
ズブ！ ぬぷ！ ぬぶちゅじゅ！ ぶちゅうううう！
笑顔のレミリアールの目の前で、メスが存分に陵辱される。
そしていよいよ。
「あああ、イクイク、イクゥウウ！」
「んんんん!? や、やめへ！ いやあああああ！」
びゅるりゅるびゅびゅびゅるりゅ！
どぴゅるりゅびゅぴゅぴゅびゅるりゅ！
「あら、やるじゃない。同時に出たの？ 引き分けね」
勃起ペニスより、精液が同時射精される。白濁雄汁はメスの膣内、そして口内に勢いよく放たれ、生臭さを撒き散らす。舌の上にたっぷりと吐き出された男根汁の温もりに、メスの顔は悲痛に歪むしかない。
「おえぇ……膣内に出すなんて……妊娠したらどうするのよぉ……ひぐ」
「心配いらないわよ。どうせあんたは怪人の苗床として孕ませられるんだから」
目の前で彼氏を殺され、そのうえレイプされてしまう。いくらこれから繁殖用苗床にされるメスだからといって、ここまでするなんてと誰もが思うだろう。
しかし、それをやるのがレミリアールなのだ。
「あはははは！ 悪の組織は永遠に不滅よ！ 世界はいずれこのレミリアール様のものになるのだから！」
悪女の嗤い声は高らかに響き、結局この夜は四十人もの女が苗床として拉致されてしまったのだ……。

※

そんな恐怖にまみれた時代ではあったが、ザイグローブへ対抗する勢力がひとつもなかったのかというと、そういうわけではない。
翌日。場所は変わってザイグローブの本拠地にて。
休養していたレミリアールのもとに、部下より急報が届く。
「レ、レミリアール様！ 大変です！ このアジトに、戦隊ヒーローたちが突入してきました！」
「っ！ へぇ……この場所を突き止めるとはやるじゃない」
戦隊ヒーローという言葉に、レミリアールの表情が好戦的に歪む。
戦隊ヒーロー。それはザイグローブに対抗するため、政府が作り上げた正義の組織である。
人数はたった五名。しかし特殊な訓練と合法的な施術を成された彼らは、ひとりひとりが怪人数名とわたりあえるほどの力を持つ戦闘集団なのだ。悪に怯える人々を守る正義として、ザイグローブと戦い続けてきた彼らが、ついに本拠地を突き止めたのである。戦闘員たちの顔には焦りが浮かんでいた。
が、しかし。
レミリアールは一人、涼しい顔をしていた。
「ふふふ。そっちから来てくれるとは好都合ね。邪魔者を一掃するチャンスじゃない」
「レ、レミリアール様……」
驚く戦闘員を前に、レミリアールは自信の笑みを浮かべる。
彼女が自信満々なのには理由があった。実は一ヶ月ほど前に、戦隊ヒーローの一人であるイエローと直接戦い、余裕の勝利を収めていたからだ。
女であったイエローはその日以来、地下室にて陵辱に次ぐ陵辱をその身に浴び、怪人を産むべく苗床として使われ続けている。今もきっと十代のメスまんこには怪人の極太ペニスがぶちこまれ、二十四時間精液を注がれ続けているだろう。女は繁殖道具だと言わんばかりの強姦が行われているのだ。
それゆえに、レミリアールにとってヒーローの奇襲など慌てることでもなかったのだ。むしろ彼女はこんなことすら考える。
（出向いてもいいけど、正直面倒なのよね……戦闘訓練にもなるし、部下に任せようかしら）
同時にこんなことも考える。
（でも、あいつらの中にもう一匹、メスがいるのよね。確かピンクがそうだったはず。わたくしが出向いてピンクだけ殺さずペットにするのも悪くないわね）
レミリアールは考える。
その顔は、まさに悪女のそれだった。

「ピンクもわたくしのペットにしてやろうかしら？」と言いながら出向く
↓シーン2 P.122へ

「イエローがいなくなって向こうは四人。わたくしが出向くまでもないでしょう」と怪人や戦闘員に任す
↓シーン5 P.131へ

著者近刊 『変身聖姫シルヴィアハート ～家畜となった敗北ヒロイン～』 好評発売中！

やめてくれぇ
死を前にした人間はみぃんなその顔をするなァ
悦い顔だ…♥
殺さな
ひいいいいッ！
息があるのはお前だけだな
あ…ぁ
はぁぁ
さて…
たっぷりと愉しませてもらおう
女は殺し男は喰らう
鬼女に蹂躙される人間たち!!
あっぎりょうらん
悪鬼凌乱
漫画 COMIC
尻戦車

ははっ

なんだこのチンポは

こんなにガチガチにして…

くうっ！

ぶるんっ

妻を殺した化け物に興奮でもしてるのか？

れろぉ…

みちっ

お望み通り

お前の全てを喰らうてやろう

ぷるぷるっ

あッ

やめっ

ああああ!!

また殺された…

このままでは村の者が皆餌食になる

一体どうすれば

しかし相手は鬼だぞわしらに何ができる

申し…

なんだいアンタ旅の坊さんか

悪いが今は…

いえ

どうも山の化生にお困りのようで

でしたら

これを…

何卒！

これ以上村の者を手にかけるのは勘弁していただけませぬか…！

はっ！ただの戯れに何を必死になっておる

人など産ませるなり嫁を取るなりして増やせばよかろう

お前たちはせいぜい妾を愉しませい

ははははは！

左様で…ならば

ギチッ…

覚悟ッ!!
はっ このような紙切れ血迷うたか…
ピタッ
ペリペリ
ビリビリ
ッ!?
ビキキ
ブク…
あ…あ…ッ!!
あああああぁ!!
なんだ…この札 妾の体に
ビキッ
ビキキ…
ビキ
入り込んでくるッ!?

力が…
抜けていく…ッ
うぐッ!!
札が効いているぞ!
ふざけるな人間ごときがァ!
こんの化け物がぁ!
捕らえろォ!
ぐっ!触るな!
やったぞ見ろあの無様な姿を!
きっ
貴様らァ…

ブッ壊れた童貞ガキンチョ最高っしょ♥
電撃ギャルに逆レイプされるショタヒーロー！
ゴールドディザイア
Gold Desire
少年ヒーロー逆レイプ地獄
小説／屋形宗慶
NOVEL
挿絵／秋月からす
ILLUSTRATION

その人々は始めに本物の超能力者、超人とネットで騒がれ、そしてTVショーで世代を問わず話題が広がった。

彼らは、まさに超人と呼ぶにふさわしい身体能力と、人智を超えた様々な超常能力【アビリティ】を発現し、徐々にその認知数は増えていく。

やがて彼らは常人【ミディオクリティ】と区別されて、超人【トランセンデント】と呼ばれるようになった。この超常的能力者たちには、時の政府によって様々な人権的制約が課され、一定の監視体制が敷かれた。それに反発し、能力濫用により政府への反抗や犯罪に走るものは【ヒール】と呼ばれるようになる。

このヒールに対する抑止力、対抗する者として能力を使い、ミディオクリティと社会を守る者は政府により【ヒーロー】と呼称されるようになった。

＊

満月が中天にかかった夜。宝石と貴金属を扱う『ゴールド&ジュエル・エルインカ』が襲撃を受けたとの通報が、この地区の治安を守るヒーローである彼に届いたのは三十五分前のこと。早々にヒールと思われる犯人を発見、追跡を開始していた。

犯人を追って壁面を蹴り、ビルの間を飛ぶように跳躍する小柄なヒーロー。全身をピッチリと包む、燃え上がるような赤の戦闘服。頭全体をカバーする仮面。数いるヒーローの中でも、伝統的なスタイルを守る今時珍しい出で立ち。ブレイズレッドの愛称で呼ばれる彼は、ヒーローの中でも特に若年だ。

「なんだよアイツ！　全然差が縮まらないじゃないか！」

まだ変声期を経ていない少年の声に焦りと苛立ちが滲む。

ほんの五〇メートル程度先を、余裕綽々、あるいは気怠げに跳躍しながら逃走する者がいた。

純金を狙って怪盗よろしく窃盗を繰り返すことで有名になった女ヒール、ゴールドディザイア。

満月の光や街の灯りが、逃走する彼女の指や手首、腰に足首にと体に飾り立てられた装飾品を輝かせた。金色にきらめく黄金のアクセサリーの数々が、黒を基調にしたコスチュームに映える。

彼女はどんなアビリティを持ったトランセンデントなのか把握されていない。破壊的能力だった場合の危険性もあり、市警から追跡を一任されたものの、捕まえるどころか追いつけないでいるのがブレイズレッドの現状だ。

後を追う少年ヒーローの視界に、温泉饅頭を二つ密着させたようなヒップがムチムチと撓みながら躍動するのが見えていた。

跳躍するたびに大きく張り出した胸がブルンと大きく揺れる。後頭部で結った金色の豊かな髪。小麦色の肌。目元のホクロ。艶やかなリップ。ブレイズレッドから見れば年上なのは間違いないだろう。一〇代後半ほどの黒ギャル然とした出で立ちの若い女ヒールだ。

そこまで観察できるほど近付いたかと思えば、次の跳躍では一足跳びにまた一定の距離まで離される。

「追いつけそうで追いつけないのはアイツに遊ばれてるからかよ！　くっそぉ！　待ぁてぇッ！」

そうして追跡するうちに、市街地を離れて湾岸の工業地域へ。配管や煙突が入り組むここで見失えば、それ以上の追跡は困難になる。

「クソッ……追いつけないなら足止めしてやる！　くらえッ！」

指を差すように、人差し指の先を逃げる犯人に向ける。狙いが定まった瞬間、その指先から赤い光線が放たれた。炎のように赤いエネルギー光線。それを体の先端部から放つことができるのがブレイズレッドのアビリティだ。

光線の発射と着弾はほぼ時間差がない。とはいえ、動き続ける相手にいきなり命中とはいかなかった。僅かに外れた光線は、逃走する黒ギャルヒールが肩から提げていたダッフルバッグをかすめる。かすめた光線がバッグの一部を切り裂き、切り口から紙幣とともに金の延べ棒や金のアクセサリーがキラキラと輝きながらこぼれ落ちた。

さすがにそれを無視できなかったか。ゴールドディザイアは金髪をなびかせて振り返るや否や、高い煙突を足場にして三角跳びに反転跳躍した。

「うわぁッ!?」

思いがけない反転と、それまでの緩慢な動きが嘘のようなツバメを思わせる鋭い機動に、ブレイズレッドが思わず声を上げた。

朽ちて屋根の大きな天窓がなくなっている廃工場へと落ちていく金の延べ棒やアクセサリー。それを追ってヒール、そして少年ヒーローが飛び込む。

煌々とした月明かりの差し込む廃工場。元々は工作機械などが並んでいたのだろう工場内は今やがらんどうで、コンクリートの床に落ちた純金の品々が立てるけたたましい音が反響する。

「もう逃がさないぞゴールドディザイア！　覚悟しろッ！」

廃工場内に着地すると、散らばった品々を拾い集めているヒールに向けて両手の指を広げ、一〇本の指先から赤い光線を一斉に放つ。

「あー、もー、ウッザい」

紙幣はそっちのけで真っ先に黄金の物品を回収している彼女は、自分へと放たれて集束する一〇本の光線を、ふわっとパーマのかかった金色の髪を払いながら〝ねじ曲げた〟。

褐色の肌に触れる前に偏向され、ブレイズレッドに撃ち返される光線。減衰した光線が廃工場の鉄骨や壁に当たって小さくパチパチと火花を散らす。

「ビームが曲がった……ッ!?」

放った光線が自分に向かってくるという予期しない出来事。当たるような角度で返ってきたわけではないが、それはヒーローとはいえまだ少年である

彼を狼狽させるには充分だった。
ゆらりと気怠げに立ち上がった女ヒール。凹凸豊かな女体が、月明かりの下で淫靡な陰影を浮かび上がらせた。
「なんなの、アンタ？　ウットーシーんですけど？」
「お、オレはブレイズレッド！　連続貴金属窃盗犯ゴールドディザイア、お前をッ、つっ、捕まえるッ！」
面と向かったゴールドディザイアの、むちりと肉感を見せる艶やかな美脚にたじろぎ微かに吃る。制服と水着を着合わせたようなフェティッシュなコスチューム。胸元に巨大な存在感を表すバスト。どっしりとしつつも丸みのある腰回り。少年ヒーローには、どこを切りとっても刺激が強かった。
「はーあぁ？　アタシ捕まんないし。捕まる気もないし？」
カツッ、と彼女のハイヒールが鳴る。たった一歩の威圧。ついさきほどアビリティである光線を跳ね返された少年は、その一歩だけで気圧される。
「くッ……細いのでダメなら太いのだ！　フルパワーでやっつけるッ！」
両手を合掌させ、その指の先端をゴールドディザイアへと向けた。
「ブレイズバスタァ――ッ!!」
それまでの光線に比べて数十倍はあろうかという太さに集束した光線が閃光を伴って発射される。光線を放った彼自身も目が眩むほどの全力出力。
「……ッ!?　なんか、変な……ッ」
あれだけ強烈だった閃光がみるみる弱まっていく。そればかりか、放たれる光線が急速に細くなっていく。
「張り切ったところでわりぃンだけどぉ、アンタのコレ、アタシと相性良すぎて意味ないわー」
――カツッ、カツッ、カツッ。
まばゆい光がほとんど失われると、光線に手をかざしながら悠々歩み寄ってくるゴールドディザイアの姿があった。ブレイズバスターの集束した光線が、かざした手の内に吸い込まれているように見えた。
「あー。アンタの出してるコレ、派手に光って無駄がある上にほとんど電気だし。アタシはアンタの完全上位互換。電気を出すだけのアンタと違って、アタシは電気を操れンの。出したり入れたり曲げたり、どうにでもねー」
それを証明するように、パチンと指を鳴らすと、通電などしていないだろう廃工場の照明が一斉に灯った。勝利の確信を滲ませた余裕の笑み。微かに目を細めたその仕草は、ブレイズレッドをぞくりと震わせる。しかし、そこは少年とはいえヒーロー。マスクの下で歯を食いしばり、もはや意味が無いと悟った光線の発射をやめて拳を握る。
「そんな敵がいることだって考えてるさ！　こんな時のためにちゃんと訓練だってしてるんだッ！」
「へー、そーなン？　エライじゃン」
拳を構えた彼に臆すること無く、ゴールドディザイアは歩み寄る。少年は近付いてくる彼女によって知らず知らず心理的に追い詰められ、闇雲に拳を向けて飛びかかった。
「ま、そんなもンだよね」
あっさりと。まるでキャッチボールでボールを受けたように、軽々と拳が受け止められた。
「んじゃ、今度はアタシの番ってことでぇ……ゴールデンコレダー2%」
不自然な黄金色に輝く放電を伴いながら、バヂンッ、と重い電撃音が廃工場内に轟く。受け止められた拳を通して、強烈な電撃がブレイズレッドを襲う。そして、意識が一瞬飛んだ次の瞬間、コンクリートの床に向けて頭から叩き付けられる。
脳が揺れる感覚。赤いマスクが割れて宙を飛び、少年の素顔が露わになった。逆立った赤毛はまさに燃え上がるよう。勝ち気そうな顔が、苦痛に歪む。
「うんっ？　ちょい待ちっ」
床に倒れ伏した彼を仰向けにして首を掴み、その顔をまじまじと品定めするように見つめる。
「なにアンタ!?　めっちゃかわいーじゃん！　やっべ♥　帰りがけのダチンっつーの？　アタシぃ、かわいーオトコノコ、ちょー好物でさぁ……♥」
チロッと小さく舌舐めずりを見せる。捕食者の目。ヌラッと淫靡に輝く瞳が、少年ヒーローの素顔を見下ろす。
ブレイズレッドが自分の首を掴んでいる彼女の手を振り解こうにも、相手の片手に対して両手でも敵わない。
「くっそおぉッ……正義はッ、ヒーローはッ、絶対負けないんだッ……負けちゃいけないんだぁッ！」
ただただ純粋に、単純に、相手が自分よりも強い。シンプルゆえに、一層屈辱的な敗因に彼は音が立つほど歯を噛みしめた。
悪の魔の手が迫ってくる。黒いロンググローブに包まれたほっそりとした指先。その手に着けられた純金のブレスレットが妖しくも煌びやかに輝く。
ヒーローを慰み者にしようとする悪意が、彼の真っ赤なバトルスーツに指先をかけた。スーツに用いられた強靭な繊維が、まるでティッシュペーパーのように引き裂かれる。ビリビリと無造作に、剥ぎ取るようにして裂かれたバトルスーツから、思いのほか筋肉質な少年の体が露わになった。
「なっ、なにする……ッ、やめっ、ろぉッ！　ちっくしょうッ！」
首を押さえ付けられたまま手足を暴れさせて抵抗する少年ヒーロー。そんな抵抗すら嗜虐心を擽るのか、彼女は欲情の色を瞳に見せる。
「大人しくしてなー？　そしたら痛くしないであげっからさー」
「やめっ、んぐむむッ!?」
力尽くで首を押さえられたブレイズレッドの唇に、ゴールドディザイアの無理矢理なキスが襲う。口の中を侵略する他人の舌の感触。初めて味わう他人の唾液。抵抗しながらも、複数の初体験に襲われる少年は目を白黒させる。
「んーふふふ♥　キスすんのも初めて

著者近刊
『淫習ノ牝贄　若妻孕ませの掟』『母娘狂艶　誘う叔母、惑わす従妹』『継母強奪　私は義息に奪われた』
『母子交姦　恋人は幼馴染みの母』『快感ホスピタル　逆セクハラカルテ』ほか
好評発売中！

人間を玩弄してきた
高慢魔女への裁き！
妖しく麗しい肉体が獣に襲われる!!
魔女ニ与フル鉄槌
或ヒハ白キ洗礼
小説／冬野ひつじ
NOVEL
挿絵／神崎詩音
ILLUSTRATION

それはまるで白亜の聖堂を焼き尽くそうとする黒い炎だった――。

大理石の床の上を、ブロンドの女が滑るように移動している。

前面が大胆にカットされたロングドレスを着こなし、房飾りの付いた鍔広の帽子を被る姿はモデルさながらの華やかさだが、爪先まで黒づくめという装いは、明らかに異様なオーラを放っていた。

「魔女め！　くッ、来るなッ！」

その黒衣の女が追っているのは、法衣の男達だ。蜘蛛の子を散らすようにして礼拝堂の中を逃げ惑っている。

「早く法王庁に知らせをッ！　なんとしても聖遺物だけは護れッ……！」

片隅に追い詰められた一団に、女は近付く。

「穢れた女よ！　立ち去れ……ッ！」

金切り声を張り上げた肥満体の聖職者の前に立つと、シトリンの輝きを浮かべる長い髪がふわりと揺れ、ヒールの音が、初めてコツンと響いた。

「た……たッ、立ち去れッ……！」

金色の十字架を目の前に掲げて祈祷を唱えようとするも、紫色に輝く女の眼を見た途端、聖職者の咽喉からは苦しげな息がヒュウッと漏れ出た。

「ふふっ、ミサの時はお静かに、ね？」

へたり込んでしまった男の鼻先に、魔女は黒レースに包まれた人差し指を突き付ける。

「な、何の……つもりだ……ッ？」

肥えた頬を汗と涙でグショグショにしながら、男は恐怖で目を見開いた。

「大丈夫よ、すぐ終わるわ……醜い豚のままではなく、石の華として散れる事を光栄に思いなさい……ね？」

「石の……華……？　まさか噂は、ほ、本当だったのか……!?」

血走った瞳に映る艶やかな美女は、その言葉に初めて笑みを浮かべた。

「お……お前が、あの石の魔女……」

死の恐怖と戦いながら、男は眼前の魔女をどうにか見分しようとした。

ロングドレスの似合う細身の身体に、柔らかそうな乳房という取り合わせは、男の好みにぴったりだ。通った鼻筋は北方の血を思わせ、紅い唇は天上の接吻を約束するかのように艶やかに光っている。普段なら脂下がった笑みを向けていたのは間違いないその美貌は、だがこの世のものとは思えない恐ろしいサタンのそれ――いや、魔女のものなのだと、男は初めて骨の髄から理解した。

「あッ、あぁ、あ……」

聖職者達の間で囁かれていた魔女による聖遺物の強奪と破壊。それが今自分の教会で起きている。そしてその結末も、男は既に聞き及んでいた――。

「や……やめろ……ッ……」

許容量を超えた恐怖のせいで、全身の筋肉が弛緩してしまっていた。

「しゅ……主はッ、あんな非道を、お、お許しにならないぞ……ッ……」

じょろろろろ……。

新調したばかりの法衣の股間が生暖かくなるのを、男は他人事のように知覚する。

「主の許し？　何それ、そんなものをわたくしが欲しているとでも？」

女は天井を振り仰いで哄笑した。

「聖職者様って、皆そう言うのよね」

その首筋の、思わず触れたくなるような、象牙の、いや、正長石（アデュラリア）の如き透き通った白さに、命の終わりが見えているというのに、それでも男の目は釘付けになってしまう。

（こ、これが……石の魔女……！）

「わたくしが欲しいのはね……お前達の命の花……それだけなの」

真紅の唇がスゥと窄められた。

「さあ、命よ……咲いて見せて！」

その瞬間、男の世界は凍り付いた。

「floreo・flos（フロレオ・フロース）！」

断末魔の叫びは口から零れる直前で凍り付いていた。というよりは、文字通り石化していたと表現する方が正しいのだろう。時間にして僅か数秒で男は絶命し、へたり込んだままの姿で、身体も服も全てが灰色の石像と化していた。そして、ピキピキという微かな音を発しながら半透明に変わっていく。

次の瞬間には、

キィィン！

鋭く澄んだ音と共に、心臓から数十本の結晶が四方八方に突き出していた。

「ふふふ……これでやっと見られる姿になったわねぇ」

等身大のクラスター水晶に変えられた男を前に魔女は満足げに頷き、差し出した右の掌をぐっと握る。

パァァン！

巨大な水晶は、呆気なく四散した。

「ひッ!?」「嘘だ……嘘だ……」

常識の範疇を遥かに超えた惨劇を見せ付けられて、残された男達は水晶の欠片を浴びたまま、幼子のように泣きじゃくる事しかできなくなっていた。

「次はそうね……お前はわたくしのコレクションに加えてあげましょうね」

愉しくて堪らないという笑顔で、女は今度は若い聖職者を引きずり出す。

「や、やめろッ！　サタンの淫売めッ！」

「あらあら、可愛いわぁ……」

首を抱き寄せ、蒼白になっている唇にキスをした。

「う……ぐッ、う……ぅッ!?」

青年はたちまち立ったまま硬直する。先程の中年男とは違い、外見は変わらない。だが、咽喉を両手で掻き毟る苦悶の表情で絶命していた。

「さ、どんな風になったかしら？」

パンと手を叩くと、焼き上がったケーキの如く、見えないナイフで頭の天辺から真っ二つに切り分けられてしまう。だが、血は一滴も流れていない。それもそのはず、青年の体内は光り輝くアメジストに満たされていた。

「あぁ……いいわぁ……」

等身大の晶洞だ。宝石商が見たら泣いて欲しがりそうな見事なジオードに向かい、女は熱い息を吐く。

「これよぉ、この感じ……はぁッ、ゾクゾクするぅ……」
両腕を回し、腰を擦り付けるようにすると、数秒前までは命のあったモノを、艶めかしく抱擁する。そして――。
「さぁ、お次は誰？　どんな華を見せてくれるのかしら？」
ふわりふわりとドレスを揺らしながら、漆黒の女は男達に近付き、一人ずつ結晶に変えていく。
パリンッ！　ピキンッ！
優美な動線の先々で、聖職者達は多彩な音色を奏でながら、血を流す事すら許されずに砕け散っていった――。
「いたぞ！」
魔女が最後の一人を砕こうとしたその時、複数の靴音と共にドアから武装した集団が雪崩れ込んできた。
「あら、無粋ね」
「ハロウィンなら、もうとっくに終わってるぞ！　このイカレ魔女めが！」
隊長らしき壮年の大男が銃を構えて叫ぶ。筋骨隆々とした身体はいかにも鍛え上げられた兵士然としているが、黒衣の女は少しも怯まない。
「魔女はとっとと森へ帰って山羊頭のチンポでもしゃぶってろ、と言いたいところだが……」
防護服の男達がドアの向こうに姿を現した。連れているのは鎖で繋がれた巨大な黒い犬だ。猟犬のようなフォルムだが、体格は通常の犬の倍はある。
「今日という今日は、ここで灰になってもらうぜ」
女は舌打ちをした。
「……何のつもりか知らないけど、わたくしの愉しみを邪魔したのは、万死に値するわね」
そう言った頬が、少し強張っている。
アォォォォン！
身の毛がよだつ遠吠えを木霊させながら、犬は、緩慢な動きながら後脚で立ち上がった。
「やだ……なんて気味が悪い……」
毛むくじゃらの後足が不意に伸び縮みしたかと思うと、むくむくと動きながら人間の脚じみた形になっていく。指の爪が伸び、刃のような鉤爪と化すのを、女はハンカチで口元を抑えながら声も出せずに見詰めていた。
「おっと、昔を思い出しちまったか？」
大男はニヤリと笑った。
「あン時は、刑場で猟犬に引き裂かれて骨まで噛み砕かれたんだって？　どこから喰われたんだ？　んッ？　そのでっかいオッパイからかぁ？」
後ろの男達も笑っている。忌まわしい魔女の記憶をこじ開けようとするかのように――。
「うるさい！　それ以上言うなッ！」
「犬に喰われるってどんな気分なんだ？　なぁ、元侯爵夫人様？」
それまで仄かに上気していた魔女の頬が、どんどん真っ白になっていく。
「残念ながら、お前のその魔術とやらも、犬には勝てないか？」
憎しみに顔を歪める魔女に向かい、大男は叫んだ。
「イカレ魔女めッ！　今からもう一度犬に喰わせてやる！　肉片となって、もう二度と甦るな……ッ！」
アォォォォン……ッ！
その言葉を合図にして、見るも奇怪な姿の合成生物（キメラ）は、女に飛び掛かった。
「きゃあッ！　あっち行きなさい！　このッ、駄犬……ッ！」
天井の四隅に設置された小型カメラがその様子を撮り続けていた。
「もうあんな目に遭うのは……ッ、二度と御免よ……！」
女は両手で胸元から黒い日傘を出現させると、それを身体の前で振り回す。
キメラが一瞬怯んだ。
グルルッ、ウガァァッ！
再びキメラが飛び掛かった時には、魔女は日傘を開いて身を躱（かわ）していた。
「……あぁ、今日はもう疲れたわ」
投げやりに呟くと床を蹴って跳ぶ。
「後は処理班だか何だか知らないけど、あの男が何とかするでしょ……」
魔女が虚空に消えた後の聖堂には、どう数えるべきかも分からない亡骸の山と、呆気に取られた男達と、狂ったように吠え続けるキメラだけが残されたのだった。
「あぁ、退屈……」
スヴィトラーナは自室の寝椅子に身体を預け、ワイングラスを煽っていた。
「遊びに行こうにも、この前の駄犬がウロウロしてるらしいし、かといってこのコ達もそろそろ見飽きたし……」
背後にずらりと並んでいるのは、全て若い男性の、色とりどりのジオードだ。
「しかしアイツもやる気あるのかしらね？　聖遺物なんか粉々にしちゃえばいいのに、二言目には壊すなだの、宝石は寄越せだの……偉そうに、何様のつもりかしら」
この空間は居心地が良い。黒を基調とした中世風の装飾に囲まれていると、自分が齢数百歳になっているとはとても信じられなかった。
「やっぱり、石はいいわね……」
魔女は冷たく輝くジオードを見上げては、うっとりと撫で擦る。
「ほう、いつ見ても素晴らしいですな」
ノックもなしに開いたドアから飛び込んできた男の声に、とろりと融けていた紫の瞳が瞬時に氷点下の輝きを見せた。
「貴方もここに混ざりたいのなら、よくてよ？」
「ハハッ、御冗談を」
声の主は、マクシム――この秘密結社ヴァルトの総統だ。物腰は柔らかいくせに無神経極まりない。今日もまたスヴィトラーナの露骨に棘のある声を受け流し、許しも得ずにズカズカと部屋に入り込んできた。新興財閥の長でもあり、常にイタリアブランドのスーツを着込んでいる。
「それで……何の用かしら？」
やや整いすぎな感もある美貌なのだ

著者近況　魔女のお供といえば猫ですよね。中世ヨーロッパで猫を駆逐したら鼠が大発生してペストが流行したと昔教わりましたが、そうではないという説が近年有力だそうです。よかった、鐘楼から投げられた猫はいなかったんだ！

が、この男にだけは触れる気も起きなかった。数えれば大戦後から八十年近い付き合いだが、声を聞くだけでも未だに虫唾が走る。秘術での延命により、人間ではないが魔術師でもないという中途半端さを軽蔑しているせいだった。

「今度わたくしの前にあんなモノが出てくるような事があったら……その時は貴方も石の華にしてあげるわ」

あながち冗談ではないと感じたのだろう、マクシムの頬が引き攣る。

「まぁ、いいわ……わたくしが退屈のあまり石になる前に、次の聖遺物を見付けておいてね」

わざとらしい溜息を吐いて見せる魔女に、男は精一杯の笑みを向けた。

「その件なのですが、次こそは愉しんでいただけそうな聖遺物が……」

秘密結社ヴァルトの結成は、遠く中世まで遡る。

ヨーロッパ大陸で魔女狩りの嵐が吹き荒れていた頃、法王の息子を名乗る一人の男が、教会の手から逃れた魔女達を密かに集めたのがその始まりだ。

男は父の支配する教会を憎み、破壊しようとした。魔女達は自分に深い傷を負わせた人間、とりわけ教会を憎んで男の下に身を寄せた。奇妙に一致した利害関係は、その後延命が尽きた男が大戦中に息を引き取るまで続いた。

（確かに魔女あっての組織だったが、もう時代は変わる……これまでのヴァルトはもう終わりだ）

車中のマクシムは後方に流れ去る街灯の明かりを後部座席で眺めていた。

（スヴィトラーナ……新婚で夫を亡くし、寂しさを紛らわせるため宝石を買い漁っていた未亡人……か、アレさえいなくなれば、もうヴァルトは完全に私だけのものになるのだ……！）

薄い唇に、暗い笑みが浮かんだ。

（人間を石に変える事しか考えていない狂った女め……何が魔女だ！　もう我慢の限界だ……ッ！）

数十人いたという魔女達も、教会との戦いを重ねるうちにその数を減らし、現在は石の魔女がただ一人残るのみとなっていた。

（あの女、聖遺物自体には興味がないクセに、教会への襲撃にだけは行きたがる……後始末をさせられるこっちの事など頭の片隅にもない）

後を継いで結社の頂点に立ったマクシムは、苦々しい表情で手にした中折れ帽を握り潰す。秘術で自らも若さを保ち、魔女まで使役する男が最も忌み嫌っているのは、皮肉にも部下であるはずの魔女だった。

（リスクを冒してまで派手にやる必要はない、教会は内側から崩壊させればいい話だ……そして、今ならあの女を使えばそれができる……！）

男にとって、今や魔女など目障りな生き物に過ぎない。我儘で、享楽的で、そして底知れぬ力を持つ、教会の比になどならぬほどの、その消滅を心から願う唯一の、悪夢――。

（今度の計画さえ成功すれば、あの女も教会も、一気に片が付く……教会の莫大な資産を手に入れられれば、私のヴァルトが世界経済を制する……名実共に世界の支配者になれるのだ）

黒々と佇む古城が近付いてくるのが目に入り、男は今度こそ歯を見せて一人嗤った。

（魔女め、お前にはその傲慢さでせいぜい私の役に立ってもらうぞ……！）

その小さな教会は、妙に新しかった。

「こんばんは、聖遺物はどこかしら？」

入口の扉の前には初老の警備員が立ちはだかっている。

「お、お前の事だなッ!?　ここから先は通すなと言われてるんだッ！」

「あら、じゃあそのコにお願いするわ」

にっこりと微笑んだスヴィトラーナは、何を言われたのか分からないと言う顔の男の左手を指し示した。

「くッ……ゆ、指が熱い……ッ!?」

「そのダイヤ、小さいけど、ちゃんと言う事を聞く可愛いコね」

「お前ッ、本当に魔女なのかッ!?　やめろ……ッ、やめてくれッ！」

必死の形相で外そうとするが、銀色に輝く結婚指輪は微塵も動かせない。いや、その裏に埋め込まれたごく小さなダイヤモンドが、まるで意志を持つかのように男の指に食い込み、自由意思を封じていた。

「ダメだッ、手が勝手に……ッ、やめろッ！　このッ、魔女めッ！」

抵抗空しく、ギィィと重たい音を響かせながら、男の手は扉を押し開けていた。

「ありがとう。じゃあ、貴方もそのコの仲間にしてあげるわ」

瞬時に結晶化し砕け散る警備員を背に、魔女は一人堂々と聖堂に入り込む。

（マクシムの言う通り、今夜こそは思う存分愉しめそうね……）

背筋がゾクゾクと甘く震えるのを感じながら、魔女は十字架に向かって一歩足を踏み出した――。

その時だった。

「……きゃッ!?」

突然全身を覆った青白い光の網に、魔女は悲鳴を上げる。

「な、何なのよこれ……!?」

慌てて後ずさりしようとするが、光は実体があるかのように四肢に絡まり、その動きを完全に封じていた。

（くッ！　低能な人間がッ、このわたくしに術を……ッ!?）

術とは、本来は魔女の持つ《種》を胸に宿す者だけが使えるものだ。だが、それを解析し人工的に組み直したのが魔術であり、現代でもその魔術を使い魔女と戦う者達がいた。それが法王庁の別動隊《薬局》だった。

「ようこそパーティーへ……我々はバカな魔女がお菓子につられてノコノコやってくるのを待っていたんだよ」

白衣姿の男女が幾人も立っているのを見て、スヴィトラーナの瞳が怒りに燃え上がる。

著者近刊　『欲望特急　スレイブパーサー搾精捜査』『交配惑星　エイリアンに娶られし少女戦士達』『魔法少女は背徳の檻で淫らなフェアリーテイル』、二次元ぷち文庫でも『とろけるいもうと　柚乃の秘蜜』『セレブ母娘飼育日記』など公開中！　好評発売中！

「黙りなさいッ！　お前達全員、まとめて粉々にしてやるわ！」
胸の奥で《種》が熱くなるのを感じながら、魔女は声を振り絞った
「ｆｌｏｒｅｏ・ｆｌｏｓ！……ッ、くは……ッ!?」
ピキ……ンッ。
微かだが鋭い音――しかし、研究者の様子に変化はない。むしろ異変を感じたのはスヴィトラーナの方だった。
（つ、爪が……!?）
黒いレース越しにでもはっきりと分かるほどの光沢が目に飛び込んできて、息を呑む。真紅に塗っていたマニキュアの代わりに、硬質の光が指先を煌めかせていた。
（これ……わたくしの爪ッ……ルビーに変わって……!?）
「自分の術じゃないか、何をそんなに驚いてるんだ？」
余裕たっぷりに言われ、魔女は怒りを剥き出しにし、絶叫する。
「人間風情がッ、許さないッ！　今度こそ死になさい……ッ！　ッ!?　きゃぁぁぁッ!?」
最初の比ではない光沢が、視界を金色に照らし、目を眩ませた。
「髪がッ、わたくしの……ッ、髪がッ!?」
魔女は愕然として髪を見下ろす。豊かなブロンドが、まるで凍り付いたかのように硬直し、内側から光を放っていた。
「そんな……バカな……だって、これはわたくしの術……!?」
しかし、唱えれば唱えるほどスヴィトラーナの全身は光を放ち、結晶化の速度を増していくばかりだった。
「あ……ッ、ひ……ッ……？」
ドレスはオニキスに、唇はガーネットに、そして瞳はアメジストに――魔女はもはや五感すら奪われていた。
（……でも、どうして……？）
「いやぁ、さっきの警備員がデータを遺してくれたおかげで、やっと防衛魔術が完成したんだよ……自分の術で石にされる気分はどうだい？」
勝ち誇った声が遥か遠くで聞こえ、石の魔女はゆっくりとその意識を失った――。

「もう石化が解けてしまうとは、さすがに魔女の生命力は侮れませんな」
「ええ、我々としても認識を改めなければなりません。あのしぶとさは脅威ですが、価値も計り知れない……ですから《薬局》で、それこそ灰になるまで調べさせていただきますよ」
古城の窓辺に立つ白髪の男は、携帯電話で話しながら、届いたばかりのデータに目をやり、ほくそ笑んだ。
「ハハハ、ラボの連中は皆張り切ってますよ。貴方同様、アレに煮え湯を飲まされた連中は多いですからね……」
はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……ッ。
こんなに息を荒げて走るのは、いつぶりだろうか。無粋な器具や肌着のように密着した服が身体を締め付け熱を籠らせ、汗で濡れそぼった不快感で疲労に拍車をかけていた。
深い森の中、魔女スヴィトラーナは縺れる脚で懸命に走っていた。止まる訳にはいかなかった。なぜなら、背後からは野太い咆哮が迫ってきているからだ。
（わたくしの身体を何日も弄繰り回したと思ったら、くッ、今度は身体測定、ですって……？）
蘇生した時に最初に目にしたのは、恐る恐る自分を取り囲む研究者達と、見た事もない金属の機械の山だった。
（ハァッ、いつまでこんな……ッ！）
一方的なこの現状は、まるで兎狩りだ。自分が惨めな兎に思えてきて、スヴィトラーナは奥歯をギリギリと噛み締める。
「魔力が戻ったらアイツらまとめて屑砂利にしてや……あッ!?」
憤慨した途端に木の根に躓き、ついに派手に転倒してしまう。
「ッ、つぅ……ッ！」
挫いてしまったのか、足首に激痛が走った。それでも慌てて立ち上がろうとした汗だくの魔女の耳に、
ウォォッ、オンッ！　ワォォン！
すぐ後ろで下草の掻き分けられる音がはっきりと聞こえた。
（追い付かれた……！）
息ができないほどの強烈な獣臭と同時に、追跡者のキメラがその巨体を現す。口からは涎を垂らし、鋭い牙を見せ付けて低く唸る様子に、もう逃げる隙はないと魔女は観念した。
（しつこい駄犬め……ッ、でも、わたくしは魔女、こんな所で喰われる訳にはいかないのよッ……！）
科学技術とやらで封印はされてはいるが、胸の奥の《種》は無事だ。
「我を我と成す種よ、我に力を！」
魔女は紫の瞳を閉じ、深呼吸した。
「ｆｌｏｒｅｏ・ｆｌｏｓ！」
振り絞るようにして詠唱し、胸の奥の《種》がそれに応えた――はずなのに、何事も起こらない。
（そうか！　コイツ人間じゃないから、術が効かないのか……!?）
殺した人間の数は多くても、面倒だと思った敵は全てヴァルトの構成員に相手をさせていた。そのせいで、自分の術が人間以外には効かない事など関係ないと気にしていなかった。
（わたくしとした事が、迂闊だった！）
人間と犬の混合体など、単なる人間の悪趣味だとしか思っていなかった自分の呑気さを、魔女は呪った。
「グルルル……グルルル……」
その間にも、唸り声は次第に大きくなっていく。
（くそッ！　犬は……犬だけはやっぱり、あぁ……ッ、犬に喰われるのだけはッ、もう絶対に、嫌ッ……！）
スヴィトラーナは頭を抱えた。
（あの時みたいに、またわたくしは殺される……ッ！）
頸動脈を噛み切られた時の絶望と敗

メリーサ
悪魔の餌食
部下をも容赦なく始末する
マフィアの女幹部!?
漫画COMIC／時丸佳久
ときまるよしひさ
調子はどう？
メ…メリーサ！
こ…の野郎お～
いいかげん吐きやがれ!!
だ…誰が
喋るか…クズども!!
何か喋った？
い…いやこの野郎しぶとくて
はあ？
まだなの？
ちょっと
え!?
待って…メリ…
!?

役立たずが！
このクズめ…
そうよ♥ クズだから あなたを攫って きたの リチャード 麻薬取締官さん♥
寂しいなら 他にも攫って くるわよ？
あなたの 娘さんとか♥
…俺に 娘など いない!!
あら本当？
ポイ…
ゴッゴッ
困ったわね
ココは 私に任せて
わかったよ メリーサ
あんた達は そのゴミ 捨ててきな！
好きにして いいのね？
じゃあ この写真の 女の子は
麻薬取締局の 秘密…話して くれたらぁ
シェリー!?
嬉しくて こんな娘の 事なんかすぐに 忘れちゃうんだ けどなぁ～♥
き…貴様ぁ

娘に手を…
ウソよ 怒らないで
!?
私にも 同じぐらいの 妹がいるの
だから 家族には 手を出さない 約束する
でも私が 何か情報を 得ないと組織に 妹が殺されて しまう
私にできる事は なんでもして あげる
お願い 教えて リチャード
お… おい…
妹を助けて

自分の手下を平気で殺す奴の言葉など…

信用できるか！

アイツは小さな子供でもレイプするようなクズよ…

組織からも処分命令が出ていたわ…

殺らなきゃ妹が組織に殺されるだけ

…

…見て妹よ…

パカッ

……

パパー♥

パパ♥

ママとの事は残念だけど

私はパパもママもずっと大好きだよ

シェリー

奥さんと別れてずっとご無沙汰なんでしょう？

!?

カチャ

カチャ

離婚の事まで？

こんな事しかできないけれど…

パチャ

パチャ

私が発散させてあげる

この女…
油断できん
や…やめるんだ…
こんな事…
あはっ
うれしい♥大きくなって♥
がんばって気持ちよくしてあげる
こ…こんな快感に…
負けるものか…

いつでもどこでも
エッチな訓練!!
新米兵士から
金髪ドS女上官の
玩具にランクアップ
番外編
小説／新居佑
NOVEL
挿絵／もり苔
ILLUSTRATION

『大陸の剣』として、名を馳せる巨大国家である『皇国』。
高度な文化と巨大な軍事力を併せ持つ、この世界の秩序と平和の担い手である。人々はその中で、平穏な暮らしを営んでいた。
しかし光の裏には常に影が付きまとう。
辺境で発生した、反体制の過激派は、『ロスト』と呼ばれる機械の獣を、過去に滅びた遺跡から発掘し、皇国に対し反旗を翻したのだ。
通常兵器を上回る、圧倒的な戦闘力を持つロストに対し、人々は恐怖した。
しかしいついかなる時代も、皇国の軍人とは、無垢な市井の民たちを守るためにその力を進化させ、発揮してきた。
たとえ相手が太古の文化の遺物であろうと、それは決して変わることはない——。

皇国の辺境にある広大な砂漠地帯。時間は昼を少し回ったところ。
見渡す限りの砂ばかりの大地では、今まさに皇国に仇なすテロリストが率いる数十ものロストたちと、皇国軍との激戦が繰り広げられていた。
「ギシャァアアッッッ！」
「ぐっ、うあぁあっっっ！」
「砂漠の上をなんて機動力だっっ！」
サソリを模した銀色の機械獣たちが、足場の悪い砂漠の上を、滑るように移動しながら、皇国軍が放つ銃弾の雨を掻い潜る。
閃く銀色の大鋏が、武装トラックを一刀のもとに破壊し、上空ではコンドル型のロストが、太陽を背に大きな金属の翼をはためかせながら、兵士たちへと襲い掛かっている。
「だめだ、このままでは防衛線が突破されてしまうっっ！」
「くそう、こいつら強すぎるっっ！」
一般的なライフルやロケット砲では、太鼓の文明の遺物であるロストに、致命傷どころか、装甲を貫通することすら難しい。
しかもそんな機械の怪物たちが、群れをなして突撃してくるのだ。これまでの常識の武器では、連中を止めることはできない。
そう、これまでの武器では——。
ヒュ……ウゥゥンンンンッッッッッ！
ドギャ……アアアンンッ！
「……ビギッ、ギギィィイッッッ！」
ふいに上空から、風を切って放たれた一発の弾丸が、それまで傷一つ与えられなかったサソリ型ロストの装甲を易々と貫き、その心臓部をピンポイントで射貫いて、機械獣の機能を停止させる。
「この攻撃はっ!?」
「……間に合った。助けにきてくれたんだな。——皇国軍遊撃魔法中隊……っっ！　って中隊のくせに、救援は二人だけかよっ!?」
先発していた陸上部隊員たちの声に導かれるように、澄み渡った砂漠の空……その遥か上からギュンッッッ！と空気を切り裂くような勢いで、銃を持った、たった二人の兵士が、頭を下にして急降下してきた。
その先頭……キリリとした軍帽をかぶり、スラリとした小柄な体躯に、ワンピース型の軍服をピチッと着込んだ金髪の少女が、後方で降下しているもう一人の隊員に通信を送る。
「さぁて、アレク特務兵。楽しい楽しい特別訓練の時間だ。彼我兵力差はざっと1：30。ふっ、大層な数字だが、これくらい達成できねば、わたしの部下……皇国の魔法士としては落第だ。地上の兵士たちを守りながら、見える敵を片っ端から撃ち落とせアレクっっ！」
「……っっっっっ。イエスマムッッッ！　アレク・ストロエフ特務兵、突貫しますっっっ！」
少女の鋭い命令に、アレクと呼ばれた隊員が微妙なテンションで応える。
（ったく、兵力差が三十倍とか、相手はロストだぞ。あの女、舐めてんのか？　いじめか？　部下を殺す気なのかっ？　俺はついこの間まで学生だったんだぞっ!?　本気で言ってるのか、ナターシャ・シロフスカヤ特佐ぁぁあっっ！）
男性用の軍服に身を包み、特殊部隊用にカスタマイズされたアサルトライフルを握ったアレクが、足裏に履いた特別な器具から、淡い粒子光をバァアアッッ！　と噴き出し、空中で姿勢をコントロールして、銃をコンドル型のロストに向けて構える。
「けど、仲間を見捨てるわけにはいかないよなっっ！　こうなりゃヤケだ。地獄の特訓で鍛え上げた魔法弾を食らいやがれっっっ！」
ダダダダッッッッッッ！
手に持っているアサルトライフルから立て続けに放たれる弾丸は、淡い色の粒子に包まれており、普通では考えられない初速を叩き出しながら、ロストたちを瞬く間に蜂の巣にしていく。
「ほう、なかなかやるな。いい魔法の成長率だ。だがまだ甘い。明日のサーキットトレーニング、お前だけ百回追加だ、アレクっ！」
「う、ぐ……イ、イエスマムっ！　メニューの追加、ありがとうございますっっ！　このまま一気に……って、うぉぉっっ!?」
驚いたアレクの視線の先には、巨大な肉食恐竜型のロストが大口を開けて、こちらに向かって二本の足で突っ込んできていた。
その大きさは体高がすでに数十メートルはあり、恐竜型、というよりは怪獣型に近いものだ。
「どどどっっ、どうするんです特佐っ!?　あんな化け物、報告にはありませんでしたよっ!?」
ありえない大きさの機械獣の出現に、思わず逃げ腰になるアレク。しかしナターシャは違った。
「ほう、連中なかなかおもしろいものを引っ張り出してきたじゃないか。正

直、これまでのやつらでは物足りんと思っていたところだ。アレク……今のお前にはまだ無理だ。だからよく目に焼き付けておけ。これが……」

言ったナターシャは、アレクと同型のアサルトライフルを肩付けに構えると、ニヤリと笑って告げた。

「……皇国最強の魔法士、ナターシャ・シロフスカヤの実力だっっ！」

キィィィンッッ！　と淡い粒子光が、ナターシャの銃口に集まっていく。

ドドドッッッと押し寄せてくる怪獣型ロストへライフルの照準を合わせると、ブロンドの美少女は、唇をニヤリと引き上げながら、その引き金を絞り込んだ。

……ダァァァァァンンッッッッ！

銀色の機械の巨獣の脳天を弾丸が打ち抜いてから、数秒経って、ようやく弾丸の発射音があたりに響き渡った。

ドドォォンンッッッ！　と小山のような敵ロストが倒れ込み、その活動を停止する。

「う、お……おぉっ。一発……ですか。さ、さすがは特佐」

「ふっ、でかいといってもこの程度か。まぁ、お前も鍛えればわたしに少しは近づけるかもな。アレク？」

そう言って笑うナターシャ。

絶大な魔力で強化されたことで、音より遥かに早い弾丸で、巨大な敵を打ち抜いた少女こそ、『殲滅の魔女』の異名を持ち、アレクの上官で、遊撃魔法中隊の隊長でもある。ナターシャ・シロフスカヤ特佐だ。

（くっ、見た目は超美少女なのに、やることは凶悪で、教え方はスパルタもいいところだからなぁ。おのれ、このドS女めぇっっ）

その実力と美貌は認めつつも、もはや虐待ではないかとさえ思える指導方針を掲げる美少女教官を、恨めし気に見つめるアレク。

「……なにか言いたそうだな。ほう、そうか。まだ命をかけた実戦経験が足らないか？　いいだろう、明日はテロリストとの最前線に放り込んでやる。やつらの拠点を一人で潰してこい。楽しみにしているぞ、アレク」

「……っっっっ。イエスマムっっ！　ストロエフ特務兵、特佐の訓練、よろこんで完遂いたしますっっ！」

（あ、ありぇねぇっっっ！　死ぬっっ！　この女の部下でいる限り、俺は絶対に死んじまうぅうっっ！）

「さて、帰還するぞアレク。帰りは魔力を全開で飛ばすことだ。わたしから遅れたら、夕飯はなしにしといてやる」

「～～～～イエスマムッッッ！」

無事にロストを殲滅し、地上部隊を救出したアレクは、それから死ぬ思いの全力飛行でもって、軍のベースキャンプへと戻っていった。

「す～、す～～」

時間は深夜。

移動距離の都合上、ほぼ一日飛びっぱなしだった今回の作戦では、まるでフルマラソンを一日で三回走ったかのような、ひどい疲労感をアレクに残した。

どうにか無事任務を完遂し、ナターシャとともにベースキャンプにたどり着いたアレクは、一人用のテントの中で、倒れるように眠りについていた。

夢の中では、銀色の牙を剥くロストの大軍も、最恐の教官である、ドS軍人のナターシャもいない。

唯一にして絶対の安息の時間だ。

軍人にとって休息も、れっきとした任務の内。それを妨げるものなどいないのだと、そうアレクは思っていた。

「……ちゅっ、んちゅっっ。ちゅぶぶぅぅぅっ」

（……んん、なんだ？　なんの音だ？）

ふいに、まどろみの意識の片隅で聞こえた粘っこい吸引音に、せっかくの熟睡の時間が遮られてしまう。

しかもなにやら股間の周りがやけに熱く、そしてその微熱に刺激されるように、妙に意識が昂ってしまうのだ。

「ん、んんん～～～っっ」

気のせいならいいが、ここは発展した皇国の首都から離れた、いまだ開発が進んでいない辺境の地である。

もし危険な虫などが股間を這いまわっていたのだとしたら、明日以降の訓練で面倒なことになる。

そんなことになれば、あの鬼のナターシャからなにを言われるか、知れたものではない。

アレクは熟睡したい気持ちを、無理やり抑え込み、厚手の布団から上半身を起こし、眠気まなこをこすりながら、自身の股間部の状態をたしかめた。

「……っっっ。いぃぃぃいっっっ!?」

薄いテントの布を透過する、わずかな月明りの中、アレクは思わず変な驚きの声をあげた。

「んちゅっ、ちゅぶぅぅっっ……ん？　お目覚めの時間か？　〝ココ〟と同じで、なかなか敏感なようだな、アレク」

見ると、薄暗がりの中、『殲滅の魔女』こと、ナターシャ・シロフスカヤが、あろうことか、アレクの軍服のズボンをずらし、露わになった逸物を、口の中に頬張って、フェラチオをしている。

驚くアレクの顔を見つめる蒼い瞳には、一ミリも悪びれた色はない。

「ナ、ナターシャ特佐っっ!?　い、いったいなにをっ!?　今は就寝の時間ではっっ!?」

「ふっ、お前のチンポが射精すればするほど、お前の内に秘める魔力は強くなる。ロストに対抗するために、部下を鍛えるのは、上官の当然の役目だろう？」

「そ、そんな……あぅっ、くっっ……っ」

ナターシャの口にした恥ずかしい事実に、アレクはむき出しのチンポを、ビクンと小さく跳ね上げさせる。

アレクは魔法士としては特異体質で、

著者近況　フレームアームズガールのプラモにハマっています。プラモの美少女なんてと思ってましたが、これはすごい。値段が少々お高いですが、大きさも手ごろで、パーツもシャープ。なによりかわいい。愛でたい。これはいいものですよ、みなさんっ。

魔法の源……マナが陰嚢に集中している。

そのポテンシャルは一般の魔法士を遥かに上回り、「殲滅の魔女」と呼ばれるナターシャさえ驚かせるものだ。

しかし性経験に疎いアレクに、その能力のすべてを引き出すことは残念ながら難しい。

よってアレクは、ナターシャの性玩具……オモチャとして、これまでも様々な恥辱溢れる責めを味わわされてきたのだ。

（あの恥辱の日々に耐えてきたからこそ、魔力も相当レベルアップしてきた……。けど、いくらなんでも、真夜中になぁっ!? 時と場所ってもんがあるだろうっ！）

アレクの心の叫びを無視し、ナターシャは続ける。

「不満そうな顔だな？ しかし、お前はわたしのオモチャだ。お前の都合など知ったことか。ふふっ、ここ最近ご無沙汰だったからな、アレク。今晩はたっぷりとお前のチンポをいじめてやろう。ありがたく思え」

見る者を虜にする芸術品のような美貌に、まるで悪魔のような笑みを浮かべるナターシャ。

その可憐な舌先から、トロォ～っとエロティックに垂れ落ちた唾が、アレクの膨らみきった亀頭を熱く湿らせる。

（な、なにがありがたく思えだっ。こっちはとにかく眠いんだよっ。っていうか、寝ないと明日がもたないっての

っ。誰かさんの地獄のブートキャンプが待ってるんだからなっ！）

こちらの思惑などお構いなしな、相変わらずのドS上官っぷりに、心の奥で毒づくアレク。

だが相手は、軍の上層部すら及び腰の、最強にして最恐の魔法士だ。そんな本音を言葉で告げる勇気はもちろんない。

「本当はもう少し寝かせたまま弄ってやろうかと思ったが、せっかく目が覚めたんだ。さぁ、もっとチンポを固くして、わたしを楽しませろ、アレクっ！」

頬を朱色に染めながら、ナターシャは大きく口を開け、アレクの勃起しきった逸物を一気に喉奥まで呑み込んだ。

「じゅるぶぅぅっっっ！ んちゅっっ！」

「あっ、ぅぅっ。くっ……ふぅぅぅっっ！」

アレクは思わず顎を反らし、股間に生えた巨大な肉棒から迸る、上官フェラの快感に声を荒げた。

（んっ、ぅぉおぉぉっ！ なんだかんだ言って、この女のフェラは……くぅぅっ、ヤバいくらい気持ちいいっっ！ チンポが……ナターシャの口の中で蕩けちまうっっ！）

軍服姿のナターシャにフェラチオされると、胸の中に浮かんだ苦々しい感情が、あっという間にトロトロに融解し、意識がチンポフェラの快楽に飲み込まれていく。

これまでも、男としてのプライドを汚される様々な女性上位の責めを受けてきたが、ナターシャが生来持つ超がつくほどのエロテクニックによって、いつもなし崩しに快楽を受け入れてしまっていた。

そして、それは残念ながら、今回も変わりそうにない。

「んぶぅぅっっ！ じゅぞろろっっ！ じゅぽっじゅぽっっ！ んんっ！」

責められてより感じるアレクのチンポに、Sっ気を誇るナターシャの唇が、いい獲物を見つけたといわんばかりに、ぐちゅぅぅっ！ と卑猥に食らいついていく。

すぼまった柔らかい唇が、固くいきり立った肉棒の先端だけでなく、根元深くまで咥え込む。

いつも鋭い罵り声を響かせるナターシャの口の中は、ほどよい温もりを保っている。

口内の暖かみが、女性に犯されているという現実を強化し、唇の端から零れ落ち、肉棒にまとわりつく涎の微熱も相まって、たまらない官能の花園へと、魂ごと吸い寄せられてしまう。

じゅぽっっ、じゅるるっっっ！ じゅぶんじゅぶんっっ！ ぐちゅぐちゅっっ！

「ふぐっっ、う、ぁぁぁっっ」

常人より遥かに太いアレクの淫茎に、ナターシャの舌が、まるで蛇のように絡みついて、唇の上下動と一緒に、肉棒をきつく締め付けてくる。

せめてもの抵抗を見せようと、歯を食いしばって快感を堪えようとするが、そんなアレクの意識を無視して、全身の毛穴から汗がドっと湧き出てくる。

勃起ペニスを、ナターシャの頭が上下し、唇にきつく扱かれるのに合わせ、身体がビクッッビクッッ！ と小刻みに悶えてしまう。

（はぁはぁっっ！ だ……だめだっ。チンポが気持ちよすぎて……。身体も頭も完全に起こされちまった……っ。くぉぉっ、ナターシャの寝起きフェラチオ……堪らないっ！）

明日に備え、少しでも睡眠をとっておかないといけない。そう頭ではわかっている。

しかし、そんな状況だからこそ逆に、上官にチンポを責められることが、アレクの内に眠るドMの背徳的快感を呼び起こしてしまう。

ムクムクッッ、ビキビキィィッッ！

「んふぅぅっっ♪ イイ感じにチンポが膨らんできたじゃないか？ ちゅるっ、じゅずりゅぅぅっっ！ 相変わらず責め甲斐のある勃起チンポだ。ああっ、わたしも……興奮してきたぞっ♪ あ～～～んっ、じゅぽぉぅぅぅっっ！」

熱っぽくそう言ったナターシャは、さらに唇をきつくすぼめると、妖艶すぎるひょっとこフェラで、アレクの剛直をジュボジュボッッ！ と熱っぽく扱き始めた。

「んあっっ、ふぁあっっ！ ナ、ナターシャ特佐っ！ んくぅっ、あっ、ぅ

著者近刊 『新米兵士から金髪ドS女上官の玩具にランクアップ』『姫騎士会長アイラ 背徳の快楽接待』『キュアリープリンセス 正義の心を悪堕ち洗脳』『気高き妖狐は悦獄に堕つ』 好評発売中！

うっ！」
肉棒から肉体すべての神経に向けて放たれる、フェラ快感の鋭い波動に、アレクの背筋がビクビクと震える。
股間を見つめるアレク自身の瞳、そのすぐ数十センチ先に、見目麗しい金髪将校のエロすぎるひょっとこフェラの光景があるのだ。
ナターシャの腕ほどもある極太の逸物を、根元まで深く咥え込んだ少女の口。それがこれでもかと細くすぼめられ、肉棒にきつく吸い付いている。
しかも首だけでなく、小柄な身体ごと上下に激しく動き、ペニスの付け根から亀頭まで、まんべんなく刺激してくる。
（はぁはぁっっ、も……もうくるっっ！　んんっっ、ナターシャのフェラでマジイキする……っっっ！）
その気持ちよさは、手での自慰や市販のオナホールなど比べ物にならない、甘い痺れを下半身全体に発信し続け、情けないが、あっという間にイキそうになってしまう。
「じゅるぶぅっっ……ふふ、わたしの口の中に、お前の淫らな先走り汁がたっぷり溢れてくるぞ？　このままイカせてやってもいいが、お前のマゾ性感は、まだまだ物足りないのだろう？　そんなお前にこいつをプレゼントしてやろうっ！」
ナターシャは、ひょっとこフェラを続けたまま、楽しそうに目を細めると、皮手袋をはめた左手、その人差し指に、得体のしれない半透明のローションを塗り始めた。
そしてネットリたっぷりとローションを付けた左手の人差し指を、サディスティックな笑みはそのままに、なんとあろうことかアレクの肛門に、戸惑うことなく突きいれてきたのだ。
ジュブッッッ！　ズブブゥゥッッッ！
「ん、あああっっ！　な、な……なぁあああっっっ⁉　ナ、ナターシャ特佐……はぁぁっっ、なにをぉぉっっ⁉」
ペニスの雄絶頂快楽にもう少しというところだったアレクの声が、驚きで裏返る。
（くっ、ああっっ⁉　いきなりなにしやがる、この女ぁぁぁっっっ⁉　そ、そこは尻の穴だぞっっっ！　だ、出すところだっ！　入れるところじゃ……くぅぅぅっっっ！）
ローションの生暖かい感触と、そのトロリとした液体に包まれた、ナターシャの小さい人差し指の形を、アレクのひくつく腸肉がはっきりと感じ取る。
ナターシャの指は、第二関節までずっぽりと尻穴に挿入されており、膀胱付近に妙な違和感を覚えてしまう。
言葉通り、肛門に、なにかを入れたことなど……ましてこんなに深くまで突きいれられた経験など、あるわけがない。
突然のことに困惑と、女の子に尻穴を弄られているという、強い羞恥感がアレクを襲う。
「なにを、だと？　ふふ、〝イイこと〟に決まっているだろう？　わたしもつい最近覚えたばかりの責め方でな。知っているか、アレク。男でも女のようにイケる方法があるらしいぞ？　さっそくわたしが試してやろう」
言ったナターシャがニヤリと、小悪魔の笑みを浮かべる。
（アナルで、男でも女のように……だと⁉　ま、まさかこの女……っっ！　まさか……まさか……ぁぁっっっ！）
ナターシャがなにをしようとしているのか思い当たり、アレクの頭が恐怖と不安でいっぱいになる。
性経験はナターシャに目を付けられるまで童貞だったアレクだが、知識だけなら豊富だ。
想像が正しければ、それはアレクが思いつきもしなかった……まさに男にとって最悪に屈辱で、最高にキモチいいプレイのはずなのだ。
「さぁ、いくぞアレク。お前に男のメスイキ……ドライオーガズムというのを味わわせてやろう。ふふふっ」
クイッッ、コリコリィィッ！
肛門に突きいれたナターシャの人差し指が、第一関節でクンっとお腹側に折れ曲がると、アレクの身体を、生まれて初めての感覚が、鮮烈な稲妻のようにギュンッッ！　と駆け巡った。
「っっっっっっっ！　あっ、あああっっ！」
（な、なんだこれっっ⁉　チ、チンポが急にむず痒く……ああっ、こ、こんな感覚初めてだ……ぁっっ！）
大の字に寝そべったままのアレクは、ふいに訪れたまったく新しい感覚に、驚きを隠せなかった。
膀胱の下……ナターシャが指で刺激している前立腺。そう呼ばれる部位のあたりが、妙にむず痒くなっている。
快感……とまだ明確には呼べないが、たしかに新しい刺激、そして感覚が前立腺のあたりで起きているのは、はっきりとわかる。
「ふふっ、直腸がわたしの指をギチギチと食い締めてくるぞ。まるで女のマンコだな。しっかりと感じているようだ。いいぞ、アレク。やはりマゾのお前にはメスイキの才能がある。わたしがしっかりと教えてやる。通常の射精など比べ物にならないと言われる、最高のエクスタシーをなっ！」
ズブゥゥッッ！　コリコリッッッ！　グヌグムッッ、コリィィッ！
ナターシャの人差し指だけでなく、ローションがたっぷりと塗られた中指が、アレクの肛門に追加され、くいっと折れ曲がった二本の指が、リズミカルに前立腺を弄ってくる。
「くぁっっ、はぅぅっっ……ん、あんんっっ！」
（あくっ、こ……声が抑えられない……っ⁉　はぁぁぅっっ、へ、変だ……っ⁉　ああああっっ、やばい……やばいっ！　コレ、前立腺責め、嘘だろぉぉっっ⁉）
男性の本来の性感帯であるチンポを

ギュアアアアッ
ドンッ
ボンッ
グギャアアアアッ
キュートな悪魔VS正義のヒロイン！
さぁ残りはあんただけよ
いいかげん地上侵略なんて諦めたら？
くっ…そんなわけにいくかっ！
ポンコツ悪魔に制裁を
漫画 COMIC 緋乃ひの

おぼえてろっ
次はこうは
いかないからな！

ばっ

逃げられると
思ってるの？

ぱ
ぱ
ぱ
ぱ
ぱ
ぱっ

ちょっ…!?

おわあああっ!!

うぐぐっ…

さてと…

今日はどんなおしおきがいいかしら？

ゴッ

ゴッ

ゴッ

くううっ…

こんなトラップを仕掛けてたなんて…ッ

ギリ!!

ギリリッ

ギシッ

ギシッ

ギシッ

ハハ…どうよ魔王様特製の触手トラップは？

はぁ

はぁ

さすがのあんたもこれは振りほどけないでしょ？

ブウン

あぐ…
うううっ…

ま…魔力が
吸われて…ッ

…えっ？

ちょっ
ややだっ…

服の魔力繊維まで
崩壊してるっ!?

アハッ
いい格好じゃない

ずるずるずるっ

さぁて…
これまでのお返しを
させてもらうわよぉ

さすが
魔王様の触手は
ひと味違うわね

っ…

こ…のっ！

ドリ

うわっと！

シュッ

洗脳戦姫
サクラヒメ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女
第七回
ダブル戦姫、
倒錯の射精遊戯
小説 NOVEL／有機企画
挿絵 ILLUSTRATION／緑木邑
サクラヒメVSコーデリア!?
フタナリ罰ゲームを賭けた
淫闘がスタート!

高級マンション最上階の一室。古風な調度品で彩られた部屋で、鬼蛙と妖月は顔を合わせていた。窓の外では雑多な光が星のように瞬いている。

フロア全体を覆うように封鎖結界が張られ、虫一匹入り込むことはできない。

流華、クリス、良平の三人が囚われてから三週間が経過し、フタナリ調教は日夜問わず続けられている。

彼女たちに関わりのある人間には記憶操作を施しているため、捜索願などが出されることはないが、対魔協会の監視をいつまでも誤魔化すことはできないだろう。

地下の調教部屋を突き止められるのも時間の問題だ。

「それでは今後の計画について話しましょうか」

鬼蛙が胸をさすりながら言う。まだ痛みは残るが、風明刃で刺された傷は九割方回復していた。

「サクラヒメは大分こちら側に堕ちてきていますね。説得した甲斐がありましたよ」

「コーデリアも陥落寸前さ。プライドの高い女ほど折れる時は一瞬だからねぇ」

「ただ、問題はまだあります」

「ふんっ、まあね」

二体の悪鬼は険しい表情で口をつぐむ。機嫌を損ねるだけで空気が歪み、結界内がヘドロのような呪力で満たされた。

「羅轟丸さま復活の儀式まであと十二日。最低でも一人は協力してくれないと儀式を遂行できません」

「なんだかんだ言っても装刃戦姫は強いってことかい。最後の一線を越えないのは三城良平が原因かねぇ？」

「ボクたちには信じがたい話だけど、愛の力とかいう不確定要素が原因なのかも」

「ハッ、まったく反吐が出るよ。それで何か策はあるのかい？　ここで失敗すれば次に儀式を再開できるのは二百年後。長すぎて欠伸が出ちまうさ」

妖月が皮肉っぽく笑う。長大な寿命を持つオニグミでも、八大鬼の立場を維持し続けることは難しい。

「調教のレベルをもう一段階引き上げましょう。二人同時調教で一気に堕とします。反撃される確率も高くなりますけどね」

「リスクは元より承知の上さ。派手にやるならあたしの劇場を使うといい。いつでも準備万端だよ」

「感謝します。土愚鬼や霧幻鬼のためにもしくじるわけにはいきませんからね」

鬼蛙が踵でカーペットを叩くと封鎖結界が解除された。今日はここまでのようだ。

部屋を出る前に妖月は鬼蛙に向かって、

「ここのところ特にご執心のようだけど、あんた本当にサクラヒメに惚れているのかい？　人間に執着しすぎると身を滅ぼすよ。気をつけな」

「ご忠告どうも。でも大きなお世話ですよ。彼女はボクのものになると決まっていますから」

ニキビ面でいつもと変わらない薄ら笑いを浮かべる。長く人やオニグミを観察してきた妖月でも鬼蛙の内面を推し量ることはできなかった。

やがて二体は音もなく闇へと消える。装刃戦姫を完全に屈服させる、フタナリ淫獄を開始するために。

◆◆◆◆

五日後。

裏社会のVIPやオニグミなど、闇の住人が集まるパーティが開催された。

彼らは贅を尽くした衣装でテーブル席に座り、シャンデリアと赤絨毯が輝く会場で、本日のショーを今か今かと待ちかまえている。

ショーの内容の大半は雌奴隷の痴態を鑑賞することで、まともな人間なら脱兎のごとく逃げ出しているところだろう。

本日は装刃戦姫をお披露目すると聞きつけて、観客たちの視線はコンサートをするような舞台に注がれていた。

「噂には聞いていたがまさかこの目で見られるとはな」

「それも二人だなんて。殺してでもチケットを確保した甲斐がありましたわ」

「グフフ、今からよだれが止まらねえぜ」

種族を問わずあちこちから期待の声が湧き上がる。

一方、サクラヒメとコーデリアは巨大な鳥かごに囚われ、舞台の上方で出番があるまで待機させられていた。

神器結晶は未だ敵の手中にあるが、衣装のみを限定的に解放され、見た目は転身時と変わらない。

見世物にされる屈辱。緞帳の後ろで客席のざわめきを聞くだけでも、心臓がしめつけられる。

「いよいよだな」

「ええ、そうですわね」

これまでも衆人環視の中で痴態を晒したことはあったが、二人同時というのは初めてだ。

観客の数もリングで戦った時とは比べ物にならず、オニグミだけでなく人間にまで嘲笑されると思うと、惨めで恥ずかしくて堪らない。

「もう一度確認しておくが奴らの狙いはわかっているな？」

「わたくしたちの心を屈服させてオニグミ陣営に引き入れることでしょう。羅轟丸の復活まで残り七日しかありませんものね」

「逆にこの七日間を凌げばこちらにもチャンスはある。儀式の直前には神器結晶を返すはずだからな。堕ちたフリをして装刃戦姫に転身、奴らを倒し良平を助けて脱出する」

「ハァ、また恥ずかしい目に遭うのでしょうけど、

著者近況　バーチャルYouTuberの動画にハマっています。YouTuberにはまったく興味がなかったのに、二次元の美少女が出るだけで好きになるなんて我ながらチョロい。

他に方法もなさそうですわね。向こうはわたくしたちが儀式について知っていると思わないでしょうし」

二人は目的を再確認し決意を新たにする。鬼蛙から得た情報だけでなく、独自の調査で儀式までの残り日数も把握済みだ。

何度も絶頂したことが結果的に功を奏したのか、オニグミの警戒もやわらいでいる。

（もう少しだけ我慢してくれ良平。必ず自由にしてみせる）

やがて舞台の幕が上がり鳥かごが下降を開始した。着地すると同時に目の眩むようなスポットライトが照射され鍵が開く。

ダブル戦姫は万雷の拍手を受け、快楽と屈辱の世界へ躍り出た。

「大変長らくお待たせしました。これより装刃戦姫サクラヒメ、コーデリアの淫獄ショーを始めます。まずは自己紹介を」

鬼蛙がマイクを握り不気味な笑顔で開演を宣言する。

「わかってはいたがなんて数だ。それにこんな格好まで……」

「まったく反吐が出ますわね」

登場人物紹介

建宮流華（たてみやりゅうか）

「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

鬼蛙（おにがえる）

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

クリス

流華の親友で「装刃戦姫コーデリア」に転身する。本名はクリスティーナ・エイミス。

妖月（ようげつ）

クリスに恨みを持つオニグミの幹部。

前号までのあらすじ 人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメこと流華は鬼蛙に敗北し、地獄のようなフタナリ調教を強いられる。そして、装刃戦姫コーデリアとして戦う流華の親友、クリスにも妖月によるフタナリ調教の魔の手が迫り……。

小声で悪態を突きながら、二人はおずおずと舞台の一番前に進み出る。

神器結晶を操作されたのか、衣装の胸と股間部分だけがハート型に切り取られ、豊満なオッパイやフタナリペニスを見せつけるように露出させられる。

秘部を大勢の視線に晒され心臓がドラムのように鼓動を早めた。

内心穏やかではないが今は演技が優先だ。先にサクラヒメが自己紹介をする。

「装刃戦姫サクラヒメだ。き、今日はわたしたちの変態フタナリショーを見にきてくれてありがとう♥ スリーサイズは上から九十六・六十一・八十三♥ おチンポの長さは二十センチだ♥ 雌奴隷がみっともなく射精するところを見ていってくれ♥ んっ、ちゅっ♥」

なまめかしく肢体をくねらせ、媚びるように観客席へ投げキスをする。

度重なる調教は黒髪乙女の女としての魅力を高めていた。

続いてコーデリアが艶やかなリップを開く。

「ハァイ、装刃戦姫コーデリアですわ。スリーサイズは上から九十・五十七・八十六♥ おチンポの長さは十八センチですわ♥ 無駄に大きなキンタマから、子種汁大量生産するところを見物してくださいね♥ 雌ブタ奴隷からのお願いですわ♥ ぶひっ♥ ブヒン♥」

お嬢さまのみっともない挨拶にワッと会場が沸く。名門エイミス家の戦闘力と財力は闇の住人たちの間でも有名だ。

その一人がエロコスチュームで変態プレイをするというのだから堪らない。

「今回はお互いに責めあってもらうよ。身体のどの部分を使っても良いから先に相手を射精させた方の勝ち。負けた方には罰ゲームがあるから頑張ってね」

「コーデリアをわたしが……」

「わたくしの身体で射精をさせるなんて……と、とても素敵ですわね」

悪趣味なやり口に辟易しながらも二人は従う。堕ちたことをアピールするために、どんなに恥ずかしい命令でもやるしかない。

「手加減はしないぞ」

「もちろん。どちらが勝っても恨みっこなし。真剣勝負ですわ」

クジを引き先攻はコーデリアに決まった。サクラヒメは言われるがままに仰向けになる。

蒼い瞳がサディスティックな色を帯び、少女はチロリと唇を舐める。

「わたくし責められるより、責める方が得意なんですのよ♥ 妖月さまに仕込まれたテクニック、見せてあげますわ♥」

「なんだと……んっ！ くうぅぅぅっ！ そ、そこは……ひゃうぅぅぅぅぅぅぅん!?」

言うが早いかスラリと引き締まった足でサクラヒメの肉竿が踏みつけられる。

足裏のほどよい固さが根元から亀頭へと陰茎をシゴいていく。被虐快感に慣らされた肉竿は、瞬く間に勃起した。

シュッ♥ シュッ♥ コシュッ♥ コシュコシュコシュッ♥

「ひぅッ！ やっ、あ……足でなんて♥ くぅっ♥ は、破廉恥なことを！ だがこんなことで射精するものか……わたしは足でイクような倒錯者ではない！」

「本当かしら？ おチンポはビンビンに勃起しているようですけど」

「ひぐっ♥ こ、これはぁ……♥ ンっ♥ くうぅぅぅぅ～ッ♥」

絶妙な足愛撫に反応して亀頭が充血し、先端から

著者近刊 『天煌聖姫ヴァーミリオン フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン』『天煌聖姫ヴァーミリオン2 フタナリ快楽に堕ちる母娘ヒロイン』 好評発売中！

は我慢汁が溢れ出る。
包茎の皮が擦れると、クチュクチュッと淫猥な水音が奏でられた。
「やっぱり足で踏まれて感じていますのね。マゾだと聞いてはいましたけどここまでだなんて。ほ～ら、もっと踏んであげますわよ変態さん♥」
「ウッグン♥　ひゃっ、んくくうぅぅ♥　やめろお♥　つま先で亀頭フニフニするなぁッ♥　踵で金玉ブニブニ踏むなあッ♥　おチンポが発情してしまう……♥　うう、足でなんて感じたくないのに……ぐっ♥　あうううぅん♥」
「恥ずかしいマゾ豚ですわね。次はこうしてあげましょうか♥」
コーデリアは胡坐(あぐら)をかくように座ると、両足でサクラヒメの金玉を挟みこみ、プレスするように揉みしだいた。
「ほおっ⁉　あっぐぅぅうううううん♥　き、キンタマ圧迫されるうぅぅうううぅ♥」
左右から挟撃する快悦に背筋がのけぞり、打ち上げられた魚めいて肢体が跳ね上がる。
マッサージされる感触は脳が蕩(とろ)けるほどに心地よく、下品な声が漏れ出てしまう。
「お……おふぅ♥　あっ、んきゅっ……金玉ぁ♥　金玉すごい♥　金玉発情する♥　ふぁぁ……モミモミするなぁぁあああ♥　サンドイッチされると感じてしまうううぅ～っ♥」
「さっさとイッてしまいなさいな。足コキ大好きなマゾヒメさん♥」
「くぅうううぅぅ……♥　が、が、我慢♥　我慢♥　我慢するんだ♥　今こそわたしのチンポはできるチンポに成長するぞ♥　絶対に足コキなんかでイッたりしないッ♥　わたしのチンポはそこまで弱くない♥」
「言いましたわね。ではこちらをどうぞ♥」
コーデリアはつま先をピンッと伸ばすと、サクラヒメの皮かむり包茎亀頭に狙いを定めた。
指を器用に動かし余った包皮を引きずり下ろすと、ピンク色の中身を露出させた。
「ぐ……ぐっひいいいいいいぃぃ♥　チンポ♥　チンポが剥かれてる♥　恥ずかしい子供チンポが大人チンポにレベルアップしてしまう♥　ひぅうううううぅ～～ん♥」
「はい、キレイキレイしましょうね～♥」
「あひゅうぅッ♥　ひぐッ♥　だ、ダメだ♥　剥き出し感じる♥　敏感マゾチンポが喜んでしまうううぅうううぅ♥」
皮かむりペニスを外気に晒され、雌猫めいた声が吐き出される。包茎特有の弱点を責められ黒髪乙女は悶絶する。
（足コキがこんなに気持ちいいなんて……も、もう出したくて仕方がない……射精したくて抑えられない……）
コーデリアのテクニックに射精欲求が高まり、精神力がゴリゴリと削られていく。口の端からは快感を吐露するようによだれが溢れ出た。
フタナリペニスが小刻みに振動し、ザーメン発射までのカウントダウンが始まる。
ズシュ♥　ズチュ♥　ゴシュ♥　ズズシュ♥　ズチュ♥　ズチュズチュ♥
「恥ずかしげもなくアクメしたいんでしょう？　さあ遠慮なくおイキなさい♥　わたくしの足でみっともなくピュッピュッしちゃいなさいな♥」
「ゾ、んグぅうううぅぅ♥　ぎッ、ぎヴヴッ♥　言うなぁ♥　いじわるされたら童貞チンポが感激してしまう♥　マゾ勃起が悦んでしまう♥　ふっ、ぁぁ♥　だ……ダメだっ♥　我慢できないッ♥　また……またイッてしまうぅうううぅぅうう♥　ぢオォオオオオン♥」
言葉で責められるだけで痛いほどに感じてしまうフタナリ乙女。
包皮がめくれるたびに背筋が震え、股間に電流めいた快美が走る。下半身をガクガクと痙攣(けいれん)させ足コキの虜になってしまう。
「あっ♥　ああっ♥　くる♥　くるくるクルッ♥　ザーメン昇ってくるうううう♥　うぐ♥　お、ほおおおおおぉ～～ん♥」
直後、肉茎がお腹にくっつくほど反り返り、鈴口からザーメンが放たれた。
快美の味を教え込まれた弱チンポは、敗北を求めるようにマゾ射精してしまう。
ボビュ♥　ブビュ♥　ブシャ……ブシャアアアアアア♥　ビュ……ヌビュククウウウウゥ♥
「ヌ、おっほおぉおおおぉぉおおん♥　イグッ♥　イグッ♥　イグうぅぅぅぅぅぅぅ♥　激弱チンポが足でこすられてイグ♥　イッてしまうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥　ぁッ♥　うぐぅッ♥　足コキ♥　足コキで♥　足オナホで最低アクメキメるうぅぅうううう♥」
足指を白濁液がベトベトに汚す。思考は白熱し、ビクンッビクンッと甲冑が跳ねた。
「くく、とんでもない射精量だな」
「フタナリ調教ってすごいのねえ。なんて面白い見世物なのかしら」
「ハァ……ハァァ……」
観客に嘲笑されながら肩で息をする黒髪乙女。栗の花に似たむせかえるような匂いが会場中に広がっていく。
射精までにかかった時間は五分二十秒。
これよりも速いタイムでコーデリアを絶頂させることができなければ、サクラヒメの罰ゲームが決定する。
「次はわたしの番だな」

攻守が逆転し今度はコーデリアが椅子に座らされ両手足を縛られる。
「んっ、窮屈ですわね。それで一体何をするつもりですの？　並大抵の責めでは射精しませんわよ」
「鬼蛙さまに鍛えられた技量を侮ってもらっては困るな。さっきのお返しをさせてもらうぞ」
サクラヒメはしゃがみ込むと、開いた股下にそびえるに雄器官に顔を近づける。
桜色の唇を開くと、フタナリペニスを口内に招き入れ吸引するように愛撫した。
チュッ♥　クチュッ♥　ンク♥　クチュッ♥　クチュッ♥　チ……チュルン♥
「ひゃうぅぅぅぅッ！　うくっ、んッ！　やりますわね……♥」
「ちゅっ♥　くちゅっ♥　小細工は苦手だふぁらな。直球勝負でいかへてもふぁう。はむっ♥　んんッ……くっ♥　フムんっ♥」
「うっ、くぅうううぅうん！　ち……おチンポがッ！　おチンポがヌルヌルにぃ……はひゅっ♥　ング……ヒクうぅうぅうぅうん♥」
巧みな舌技に甘い喘ぎが吐き出される。鬼蛙に仕込まれた技巧は容赦なく肉竿を悦ばせ、理性をトロトロに溶解させていく。
「はぁあぁぁ！　先っぽがゾクゾクしてぇ……♥　あふあぁあああああん♥」
竿にねっぷりと絡みつき、カリ首の裏側を丹念に舐める変幻自在のテクニックが、勃起肉竿を酔わせていく。
腋や膣孔から淫臭が噴き出し、快楽のおかわりを要求する。射精調教されてきたコーデリアでなければ、すぐにでも精を解き放ってしまうだろう。
「どうふぁ？　ひゃへいしたくなったふぁろ？　んじゅ♥　ちゅぐぐぅ♥　じゅぶ……じゅくう♥」
「んぐうぅうぅぅう！　ま……まだですわ！　こ、これしきのことでわたくしのおチンポは屈しませんわ……あっ♥　ああっ♥　へ、平気なんですから♥　んんっ♥　くうぅぅぅ～ッ♥」
ピンッと勃起肉の角度を上げながらも、押し寄せる射精衝動に抗う。過酷なフタナリ嬲りを思い出し、菊門を引き締めて絶頂を撥ね除ける。
銀のアーマープレートがカチャカチャと音を鳴らした。
（流華さんには悪いですけど罰ゲームはもうこりごりですの。絶対にイクわけにはいきませんわ）
排泄中継や豚コスプレのような目には、もう二度と遭いたくない。
人として終わるような醜態を再び晒すなんて耐えられない。
「さしゅがに我慢強いな。だがこれはどうひゃ？　ん……ふぅうぅん♥」
「一体何を言って……エッ!?　そ、それはまさか……！」
コーデリアの理性を決壊させようと、サクラヒメは新たな手段に出た。
Gカップ巨乳を両手でたっぷんと持ち上げると、根元から肉竿を包み、フニフニとパイズリを始めたのだ。
下乳の部分で滑るように金玉も愛撫し、極彩色の快美を提供する。
ムニュッ♥　ムニュッ♥　グニュッ♥　フニュッ♥　ムニュフニュンッ♥
「お、おッふぅうぅうぅう♥　ひっ♥　うぐぅ……♥　おっぱいだなんてっ♥　はうッ♥　ら……らめですわあああああぁぁあ♥　お、おチンポにキンタマまでぇ……♥」
「んぐっ♥　パイズリ気持ひいだろ？　ふぁむっ♥　ちゅうう♥　んぶ……はぁあああ♥」
「ひぎゅっ♥　おぐッ♥　わたくしの巨玉マラが変になってしまいますわ♥　んぐッ、く……ひッ……うぐうぅうぅんッ♥　デカチチ愛撫気持ち良すぎますのおぉおおおおおぉ♥」
たわわに実った双乳が容赦なく淫悦を伝えてくる。子種汁をたっぷり溜めこんだ睾丸を抱擁されると、肉茎も感謝勃起せずにはいられない。
重量感のある乳圧で宙に浮いたような心地よさに包まれ、鈴口からはカウパーが泉のごとく湧き上がる。
「ちゅっく♥　んんッ♥　ふぉらみっともなく射精してひまえ♥　パフパフおっぱいでチンポもキンタマもイッてしまへ♥」
「あぢ♥　ん……ひぐッ♥　ふひいいいいいいんん♥　だ……ダメッ♥　もうダメですわ♥　イグッ♥　わたくしのズルムケおチンポがイッてしまいます♥　ホルスタインみたいなデカ乳パイズリで射精してしまいますのおオオォォオオオオ♥」
金髪縦ロールを振り乱し乳悦に狂うお嬢さまヒロイン。精管がわななくと、壊れた蛇口のように白濁液が噴き出した。
ビュク♥　ビュクク♥　ドプ……ドプププウウウウ♥　ピュー♥　ピュウゥー♥
「ごほぉおおぉおおおおお♥　いっ、イイイ、イグうぅぅぅぅぅぅッ♥　ザーメン♥　ザーメン♥　ザーメン大噴射あああぁぁあああ♥　おっぱいでイク♥　パイズリでイクッ♥　わ、わたくしの雌ブタ子種汁がでちゃいますのおおおぉおお♥　あへあぁあああああ～～ん♥」
はしたないイキ顔を衆目に晒し、パイズリ絶頂する。マシュマロのような巨乳圧力に肉竿も睾丸も屈してしまう。
Gカップ巨乳の谷間は白濁液で真っ白に染められた。
「おっぱいすごいですわ♥　お、おチンポ耐えられ

魔剣士リネ2

乙女穢されし戦場

【第12話】最後の魔武具

原作（ORIGINAL）／まくらカバーソフト

小説（NOVEL）／酒井仁（さかいひとし）

挿絵（ILLUSTRATION）／桐島サトシ（きりしま）

妖臣に踊らされ、邪淫悪欲に眩む聖王！
そして悪意ある教唆が物語を最終局面へと誘う！

電子ノベルズ第1巻～第2巻
各電子書籍サイトにて
好評発売中！

1

北方に近い国境はまだ風が冷たく、春の訪れを遠く感じさせる。

しかし、行き交う人々の顔は活気に満ちていた。この小さな街、ガナッシュが、かつて侵略者に襲撃され、崩壊寸前だったことなど嘘のようだ。

「正門の修理も万全のようだな」

街のあちこちを回っていたアレスは、安堵の表情を見せる。

ヒッピア帝国の襲撃を受けたとき、ガナッシュの防備は酷いものだった。正門は壊れたまま修理がされず、街を守る市民兵には粗末な武器しか支給されない。しかも異民族の襲撃を受けるや、街の領主は若い娘だけを連れてさっさと逃げてしまったのだ。

「アレス将軍！　アレス将軍ではありませんか!!」

見ると、齢五〇過ぎと思われる市民兵が敬礼をしている。手に持った槍はしっかりした作りのもので、十分戦闘に耐えうるだろう。

アレスが敬礼を返すと、男は満面の笑みで深々と頭を下げる。

「いつぞやは失礼いたしました。お陰さまで、娘も帰って参りまして、街にも平和が戻りました」

ガナッシュ領主は、責務を放棄した咎で、王都の地下牢にいる。

領主に拉致され辱めを受けた娘たちも、エルヴィンに保護され、無事に親元に届けられた。

「それもこれも皆、聖王さまのお陰でございます！」

男の言葉に周りにいた市民兵もそうだそうだと声を上げる。

「聖王さまとアレス将軍がいらっしゃれば、ハイランドはもう安泰だ！」

確かに……国境の守りは以前とは比べ物にならぬくらい充実し、ハイランド正規軍による定期巡回によって野盗や山賊に対しての警戒も万全。

「だが、まだヒッピアの残党が残っている。警戒は怠らぬように」

「はっ、聖王陛下に栄光あれ！」

口々に聖王バロックを褒め称える市民たちの気持ちは、偽りのないものだろう。ただ、これらの成果はバロックの指示によるものではない。

ランドルフやウォード、ワインバーグらが粛々と政務をこなし、軍の規律を厳しく正した結果である。

（だが、彼らに平和がもたらされたことに違いはない）

自分は将軍であり、騎士。民を守り、平和の礎となることこそ本分。

「アレス、こんなところにいたのか」

と、声をかけてきたのはアレスの片腕にして盟友の騎士エルヴィン。後ろには弓の名手セリアの姿がある。

「エルヴィン……何か動きが？」

長年背を預け合ってきた親友とは、少ない言葉で通じ合える。エルヴィンはヒッピアの残党が散発的に集落を襲撃していることを報告した。

「まとまった動きでない分、後手に回るしかないな。少人数の部隊を編成、国境を中心に警戒に当たらせてくれ」

「了解。で、セリアちゃんも部隊を率いて出たいって言ってるんだけど」

「うむ……セリア、くれぐれも無茶はするんじゃないぞ」

「は、はい！」

アレスはクロスボウの達人キースとセリアを中心に部隊を編成、国境警備に当たらせることにした。心配でないと言えば嘘になるが、今は少しでも多くの兵を警備に当たらせたい。

（懸案は魔武具だ。最後の一つがまだ見つかっていない）

それに、ヒッピア帝国滅亡の裏で暗躍していた魔族の動きもまだはっきりしない。聖王万歳、平和万歳と喜ぶのはまだ尚早だとアレスは理解していた。

その一報を最初に受けたのは、セリアの部隊であった。

ガナッシュよりもさらに小さな村落がヒッピア兵の襲撃を受け、村人が負傷、食料が奪われたらしい。セリアたちは早速その村に向かった。

「えっ、相手はたった一人なんですか」

「それが信じられねえほどの大男で、熊みてえな唸り声上げてたで、俺ぁ腰抜かしちまったよ、お嬢さん」

村人からの証言を聞くほどに、そのヒッピア兵は異常というか尋常ではないと思われた。

「キースさん、まさかその男は魔武具に取り憑かれているんじゃ」

「その可能性はある。セリア、キミは直ちに援軍を――」

しかし、セリアは思案した後、キースに援軍要請をしてもらうことにした。獲物の痕跡を追い、追い詰める狩人としての技量に自信があったからだ。

件のヒッピア兵の居場所はあっけなく見つかった。山奥の炭焼き小屋から、獣とは違う異臭が漂っていたのだ。

「セリアどの、相手は一人、一気に踏み込んではどうだろう」

血気に逸る兵士を抑え、セリアは山小屋に近づく。そっと内部を窺ったセリアは息を呑んだ。

「ぐふぅ、ぐぅうぉおお……」

ぼろぼろの甲冑に包まれた肩が上下に動いていた。

盛り上がった背中の筋肉、太い二の腕、単に「巨漢」という言葉で収まらない圧倒的な肉。

（！　女の人が襲われてる……！）

確かに年若い娘が巨漢に組み敷かれているのが見えた。村人が攫われたとは聞いていないので、どこかから拐かしてきたのかもしれない。

「うぉ、うぉおおんっ！　ごぉおお」

大男は獣のような唸り声を上げて腰を振り立てる。犯すと言うより貪るような暴力に、少女は抵抗するでもなく、痛がりもしない。だが掠れるような声が、セリアと兵士の耳に届いた。

「あ……アクラムさま……っ」

アクラム。その名前を知らぬハイランド兵はいない。アクラムとはトリスタン公国を滅ぼし、ハイランドに幾度

著者近況　野菜が高ぇな！　冬は鍋と決めてる私にはつらい状況ですが、こういうときはエノキやシメジなどのキノコ軍団が力を発揮してくれます。うおぉ、菌糸パワー！

となく侵攻してきたヒッピア帝国の皇帝ではないか。
セリアは知らないことだったが、犯されている少女は、トリスタン公国のカーラ王女付きの侍女であった。
（けれどマンズールは、アクラム皇帝は魔族に亡き者にされたって……）
「セリアどの！　ヒッピア皇帝にまみえるとは千載一遇の好機！　ぜひ我らの手で彼奴の首級を」
「ま、待ってください。キースさんが援軍を連れてくるまで様子を……」
しかし、マンズール討伐以来、大きな戦のなかった兵士たちは戦功を欲していた。こちらは複数、相手は一人。取り囲んで押し包めばいかにヒッピアの皇帝でも、という奢りもあった。
セリアが制止する間もなく、兵士たちは小屋の扉を蹴破り、一気に押し入るやアクラムに剣を向けた。
「ヒッピア皇帝アクラム！　貴様の命運今ここで尽き」
ぶぉぉおおおんっ。
何が起こったのか、咄嗟に理解した兵士は誰ひとりいない。アクラムの肩から放たれた疾風のような裏拳が、兵士の剣を砕き、その頭部を吹き飛ばしたのだ。
「ひぃいっ？」
（あの力は――――魔武具の力⁉）
ゆっくりと振りかえったアクラムの顔は、もはや人のそれではない。長い犬歯をむき出しに威嚇の唸り声を上げるその顔は、魔武具に取り憑かれたものの顔だ。
「に、逃げて……っ」
セリアが叫ぶより早く、アクラム――――アクラムであったそれはましらのように小屋の中を疾駆し、兵士たちの胸を貫き、腕をちぎり、はらわたを引きずり出していったのだ。
「ぐぎゃぉぉおおおおおおおお！」
どかどか胸を叩いて咆哮するその股間に、巨大な陰茎がそそり立つ。
「ひっ」
狩人としての本能がセリアに弓を構えさせるが、アクラムの動きは野性動物の動きを超越していた。
あっという間に弓が叩き落され、その勢いで強化服が紙のように引き裂かれる。乳房が露わになったセリアは、その場に尻もちをついてしまう。
（駄目、やられる……）
山のような巨漢を見上げたセリアは、死を覚悟した。だが、目を爛々と輝かせるアクラムは、唇を歪め「笑み」を浮かべたのだ。
「ぐぅぉおお……」
ぬうっ、と伸びた爪先から兵士の鮮血が滴っていた。
その手が美しい茶髪を掴む。恐怖に凍りつく後頭部を容赦なく握ると、そのまま自らの股間に近づけたのだ。
ひぃ、と小さく悲鳴を上げたセリアの目の前に、ぬらぬらと体液に濡れた肉の棒が迫る。男と女の艶めかしい体液の臭いで息が詰まりそうだ。
「んぅううっ！　い、や……っ」
セリアはアクラムの意図を察し、恐怖した。魔武具に取り憑かれたこの男は、動物的本能だけで動いている。兵士たちには殺戮衝動を、そして若い女体に対しては肉欲を感じたのだ。
「ぐほぉお、うごぉおおんっ」
ぬるっ、にゅりりっ。少女の小さな顔を陰茎の裏筋に擦りつけ、アクラムは快美の声を上げる。
必死に顔を背けるセリアだが、力の差は歴然。ぷはっと息継ぎをした隙を突かれ、ぐぷりと巨大な肉棒が少女の口に押し込まれた。
「んぐ、むぐぅううっ？」
ぐっぷ、ぐぷ、ごぽっ。子どもの拳ほどもある亀頭で息が詰まり、気が遠くなる。アクラムの腰の動きに合わせ、抜き差しされる陰茎がセリアの頬粘膜を突き上げ、涎が否応なく垂れ落ちてしまう。
「うぉ、ぐぁぉおおおお！」
温かく柔らかな少女の口内の感触が気に入ったのか、アクラムはますます激しく腰を振り立てる。セリアは何度も顎が外れそうになりながら、アクラムの腰にしがみつくのが精一杯だ。
（ここで下手に私が逃げたら、あの女の人がまた酷い目に遭わされる……このまま時間稼ぎをしていれば、キースさんが援軍を連れて戻ってくる、はず……）
「うぉおお、ぐぉおおぁぁあんっ」
どくんっ。どく、どく……セリアの口の中でアクラムの茎が跳ね上がる。そのリズムに合わせ、どろりとした液体が喉奥にぶつかるのを感じた。
げほげほと咳き込むと、セリアの唇から白い体液が噴きこぼれて太腿に滴り落ちる。その野性的な臭いと熱にセリアはぞっとする。
（でも、こいつは今までの魔武具憑依者とは違う……？）
セリアはこれまで、何度か魔武具に取り憑かれたヒッピアの武将を見てきた。彼らは人間離れした力と、矢で射ぬかれても平然としているタフさを備えていた。
おそらくはアクラムもそうなのだろうが、これまでの憑依者には凶暴さはあっても、最低限の理性が残っていたのだ。
「うぉおお、ごぉおおお！」
だが、アクラムは違う。
目の前の少女に対し、その愛らしい唇に陰茎をねじ込んで腰を振り立てることしか考えていない。そのことはむしろ幸いであった。
（口だけなら、口を汚されるくらいならまだ耐えられる……！）
その間に、キースが呼びに行った援軍が間に合ってくれさえすれば、まだ勝機はある。
（私が、諦めさえしなければ！）
どく、どくっ……再びアクラムがセリアの喉奥に汚液を放つ。
むせ返る精液の異臭に涙を浮かべつつ、そそり立つ牡の茎を、少女は果敢にくわえこんでいくのだった。

著者近刊　『魔剣士リーネ２ 乙女穢されし戦場 第１巻』『魔剣士リーネ２ 乙女穢されし戦場 第２巻』『魔法少女W調教　フレイア&クリスタ』『引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです』　好評発売中！

2

ダイヤモンドシティ、聖王後宮。

聖王バロックの寵姫の中で最も早くに懐妊したヘスティア公国女王、ベアトリス。既に産み月に入り、その腹部は丸々としている。

胎児の成長は順調のようだが、いつ陣痛が起こってもおかしくない状況であり、初産だけあってベアトリスも苦しそうである。

「ベアトリス、侍医を呼んだほうがいいんじゃ」

「いいえ、まだ……大丈夫ですわ」

心配げなリーネに弱々しく微笑むベアトリス。その白く小さな手をシンシアがきゅっと握る。

「私たちが見守ってるからね、何も心配することはないよ」

そう言って励ますシンシア、そしてリーネのお腹もかなり膨らみが目立っている。ベアトリスが出産すれば、程なく二人も聖王の世継ぎを産み落とすことだろう。

聖王の血を受け継ぎし赤子を宿した三人の美少女たちが互いに励まし合う中、そこに当の聖王の姿はない。

出産間近の美姫たち相手に荒淫に及ぶこともかなわなくなったバロックは、黄金の騎士団が集めてきた貴族令嬢に関する資料をためつすがめつ検討していた。

「……して、アレスの動向に不審な点があると、お前は言うのだな」

資料から目も上げずに問う聖王に、側近の青年は恭しく頭を下げる。

「そうは申しませんが、ヒッピア帝国亡き後、ハイランドを脅かす大国はもう大陸にはおりませぬ。しかしそれは戦で武功を上げる機会もなくなったということ」

「ふむ」

「アレス将軍はかつて、グスタフ王に反旗を翻した前歴があります。確かにグスタフ王は権力に腐心して民に重税を課し、他国にまで攻め入ろうとした愚王でありました」

そしてバロックにとってグスタフ前王は、自分の聖王の血を恐れ、辺境の城に蟄居させていた不遜の輩でもある。

「しかしアレス将軍は数々の軍功、そして民の信頼が厚いのをいいことに増長し、神聖にして不可侵な聖王陛下の座をも狙うつもりなのではないかと憂慮しております」

側近ヘルメスがアレスに関する誹謗中傷をバロックに吹き込むのは、これが初めてではない。

ときにはアレスの勇敢さを称えつつもすべての頂点に立つのはバロックを置いて他にはないと持ち上げる。そうやってバロックの自尊心と危機感を煽ることで、バロックの中にアレスへの不信の芽を育ててきたのだ。

「そう、そうだな。ワシこそが唯一無二の聖王であることを、広く民に、そして今一度アレスの目の前で知らしめねばならぬかもしれぬ」

以前バロックは聖王の威厳を示すために、アレスの目の前でリーネたち三美姫を犯すところを見せつけてやったことがある。だが、ヘルメスはそれでは手ぬるいのではと、言葉巧みにバロックを洗脳・誘導していた。

「ヘルメス、平和宣言式典に先立ち、直ちにアレスを王都に呼び戻すのだ」

「御意――――」

ヘルメスの邪悪な瞳の色に、バロックが気付くはずもなかった。

バロックの命でダイヤモンドシティに呼び戻されたアレスは、街のそこかしこで横断幕を広げたり、花を飾り屋台に集う市民たちを見た。

既にヒッピア帝国との戦は残党狩りに移行しているので、今のアレスは単独で帰国している。それゆえに市民たちはアレスに気付く様子もなかったのだ。

（皆、何の不安もなく笑い、喜び合っている。グスタフ王の治世の頃とは大違いだ）

横断幕には「バロック陛下万歳」「平和宣言万歳」「ハイランドに永久の平和を！」という文字が躍る。それらを見ながら、アレスは馬を王宮に向けるのだった。

「アレス将軍、ようこそおいでくださいました。どうぞお寛ぎを」

王宮に着いたアレスは、見慣れぬ娘たちの出迎えを受けた。

聞けば娘たちは聖王直属の「黄金の騎士団」によって集められた貴族令嬢だという。

すなわち彼女たちは次代の聖王の世継ぎを産むための寵姫たちなのだ。後宮にはもっと大勢の寵姫がいると聞かされ、アレスは驚いた。

「これはこれはアレス将軍。貴殿のご活躍は聞き及んでおりますぞ」

「ヒッピアも滅んだ今、アレス将軍も手持無沙汰でお困りでしょう。わっははは」

やけに尊大な態度と、豪奢な甲冑に身を包んだ騎士たちは、件の騎士団であろう。聖王直轄の騎士である彼らは王宮でも幅を利かせているようだ。

「バロック聖王陛下による平和宣言式典、まことに楽しみですな。市民たちも喜びに沸きたっております」

確かに、王都の様子を見る限り、民たちも、記念式典を今や遅しと待っている様子だった。

（平和式典か……そうだ、俺はそのために今日まで剣を振るい戦ってきたんだ。政務に関してはランドルフどのたちもいる。バロック陛下の下で大陸が平定されるなら、それに越したことはないだろう）

そう自分に言い聞かせるアレスの心中では、リーネたちの姿が一瞬だけ想起されるが、青年はすぐにそれを打ち消したのだった。

いよいよ聖王による平和宣言式典が開始される、その少し前。

リーネは後宮で着ている薄布のドレ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/